

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 167

山崎古窯跡

一般県道磯上備前線道路改築に伴う発掘調査

2002

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 167

山崎古窯跡

一般県道磯上備前線道路改築に伴う発掘調査

2002

岡山県教育委員会

序

本書には、備前市伊部に所在する山崎古窯跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、一般県道磯上備前線道路改築に伴う発掘調査であります。岡山県教育委員会では、この改築工事計画に先立ち、掘削が及ぶ範囲に所在する中世備前焼窯跡とそれに伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、関係部局と調整・協議を重ねてきました。その結果、現状での保存は極めて困難であるとの結論に達し、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

調査地点が所在する備前市伊部一帯は、古より焼き物の産地と知られており、現在においても、その歴史を受け継ぐ備前焼の生産地として全国的に知られています。今回の調査では、室町時代前半期の窯跡1基とそれに伴う溝を確認しました。窯跡は、推定ではありますが20mを超えるものとなり、それ以前の時期に属する10m前後の備前焼窯跡とは規模を画するものであります。これ以後、室町時代末期の不老山東口窯跡が40m、その後の伊部南大窯跡は50mにも達し、備前焼の窯は大型化へと向かいますが、山崎古窯跡はその過渡的な段階の窯跡にあたるようです。また、陶片も多く出土し、備前焼の長い歴史とその技術の一端を知る上でも貴重な資料を得ることができました。

これらの成果を収めましたこの報告書が、今後の調査研究、文化財の保護・保存のために活用され、一方で地域の歴史研究を深める資料として広く利用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、現地調査の実施、報告書の作成にあたって、岡山県東備地方振興局、備前市教育委員会、ならびに地元の関係各位から温かい御理解と御協力を賜りました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 瞳夫

例　言

- 1 本報告は一般県道磯上備前線道路改築に伴い、岡山県東備地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成12年度に発掘調査を実施した山崎古窯跡の発掘調査報告である。
- 2 山崎古窯跡は備前市伊部に所在する。
- 3 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員重根弘和が担当し、平成12年9月4日から平成12年10月12日まで実施した。
- 4 調査面積は330m²である。
- 5 本報告の作成および編集は岡山県古代吉備文化財センター職員の協力を得て、重根がおこなった。
- 6 本報告の執筆は、第1章第1節は高畠知功が、それ以外は重根が行った。
- 7 遺物写真の撮影については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 8 発掘調査及び報告書作成にあたっては、多くの方から御支援、御助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。

石井啓氏、臼井洋輔氏、上西節雄氏、扇崎由氏、唐口勉三氏、木村茂雄氏、葛原克人氏、河本清氏、北野俊明氏、近藤康司氏、嶋谷和彦氏、續伸一郎氏、沼本一成氏、能勢強氏、野村文夫氏、乗岡実氏、間壁忠彦氏、間壁葭子氏、松尾和子氏、森山祐二氏、日野佳子氏、平川忠氏、福嶋一行氏、山田繁樹氏、山根彰正氏、湯浅馨氏

- 9 本報告に関わる出土遺物ならびに図面、写真等の記録類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻 1325-3）にて保管している。

凡　例

- 1 本報告で用いた高度は海拔高であり、方位は平面直角座標系Vによる。
- 2 遺構および遺物実測図の縮尺は、基本的につぎに統一した。
遺構実測図 1/60 遺物実測図 1/4
- 3 本報告に掲載した土器実測図のうち、中軸線左右に白抜きのある図は、小片のため口径が不確実なものである。
- 4 土色の標記は『標準土色帳』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所監修）に従う。
- 5 第1図に使用した地形図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「片上」を複製し、加筆したものである。

本文目次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査および報告書作成の経緯と体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査、報告書作成の体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 発掘調査の概要	4
第1節 調査区の概要	4
第2節 遺構	4
第3節 遺物	8
第4章 まとめ	15

挿図目次

第1図 調査地周辺の地形と主要遺跡 (1/25,000)	3
第2図 調査区 (1/340)	4
第3図 窯跡平面図 (1/60)	5
第4図 窯跡断面図 (1/60)	6
第5図 遺物出土地点区分 (1/180)	8
第6図 第1層出土遺物① (1/4)	8
第7図 第1層出土遺物② (1/4)	9
第8図 第12層出土遺物 (1/4)	9
第9図 第13層出土遺物① (1/4)	10
第10図 第13層出土遺物② (1/4)	11
第11図 第16層出土遺物 (1/4)	12
第12図 第17層出土遺物 (1/4)	12
第13図 第2層出土遺物 (1/4)	12
第14図 第3床面出土遺物 (1/4)	13
第15図 第5層出土遺物 (1/4)	14
第16図 第6層出土遺物 (1/4)	14
第17図 消費地出土備前焼型式分類試案 (壺・甕1/25、その他1/10)	17-18
第18図 山崎古窯跡層別出土遺物一覧 (1/8)	20
第19図 窯跡出土備前焼型式分類試案 (壺・甕1/25、その他1/10)	21-22

表目次

第1表 備前焼窯跡一覧 (発掘調査されたものに限る)	23
第2表 遺物観察表 (擂鉢)	25
第3表 遺物観察表 (壺、甕ほか)	26

図版目次

図版1 擂鉢拓本 (1/4)	図版6 出土遺物
図版2 壺、甕、その他拓本 (1/4)	図版7 出土遺物
図版3 1 調査区全景 (北東より)	図版8 出土遺物
2 窯跡から片上湾を望む (西より)	図版9 出土遺物断面
図版4 1 窯体第3床面検出 (南東より)	図版10 擂鉢卸し目
2 窯体埋土 (南東より)	図版11 窯壁 (1/2) 床面断面 (1/2)
3 窯体埋土 (南より)	
4 窯体第3床面下 (東より)	
5 窯体縦断面 (南より)	
図版5 1 調査風景 (南東より)	
2 槽埋土 (南東より)	
3 窯体第2床面下溝 (南東より)	
4 窯体完掘 (南東より)	
5 調査終了 (南より)	

第1章 調査および報告書作成の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

一般県道磯上備前線は、長船町磯上から備前市浦伊部を結ぶ地方幹線道路であり、備前市から岡山方面への主要な連絡道路である。しかし、現道は長船町・備前市との市町界から備前市浦伊部区間までの2.4kmのうち1.8kmが未改良区間で幅員が3~4mと狭小で、見通しも悪く、ガードレールなどの道路安全施設も設置されていないことから、通行に支障をきたしていた。さらに近年、備前市浦伊部地内において工業団地・住宅団地の造成が急速に進み、その生活道路として交通量が大幅に増大している。

その状況のなか地元から、慢性的な交通停滞の緩和をはかり、安全な生活道路の確保等への強い要望が出され、岡山県による地域の活性化および沿道の整備を含めた道路改築が計画される。しかし、計画路線内には備前焼の山崎古窯跡の所在が古くから知られており、その対応について、平成12年8月9日に県文化課、備前市文化課、東備地方振興局、建設業者による事前協議がもたれる。窯跡の残存、工事の進捗状況などの諸事情から路線の設計変更は困難であるとの判断により、発掘調査を実施し、記録保存の処置を執ることとなった。現地にて、安全面を含めた発掘調査の条件整備事項について協議を行う。

平成12年8月31日、東備地方振興局長から法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘の通知。平成12年9月4日、岡山県古代吉備文化財センター所長から法58条の2の規定による埋蔵文化財発掘調査の報告を行う。 [高畠]

第2節 調査、報告書作成の体制

調査体制

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬 定生
-----	-------

岡山県教育庁	
--------	--

教育次長	宮野 正司
------	-------

文化課	
-----	--

課 長	松井 英治
-----	-------

課長代理	佐々部和生
------	-------

課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
---------------	-------

文化財保護主査	福本 明
---------	------

主任	奥山 修司
----	-------

岡山県古代吉備文化財センター

所 長	正岡 瞳夫
-----	-------

次 長	能登原 巧
-----	-------

<総務課>	
-------	--

総務課長	小倉 昇
------	------

課長補佐(総務係長)	安西 正則
------------	-------

主 査	山本 恭輔
-----	-------

<調査第一課>	
---------	--

調査第一課長	高畠 知功
--------	-------

課長補佐(第一係長)	中野 雅美
------------	-------

文化財保護主事	重根 弘和 (調査、整理担当)
---------	--------------------

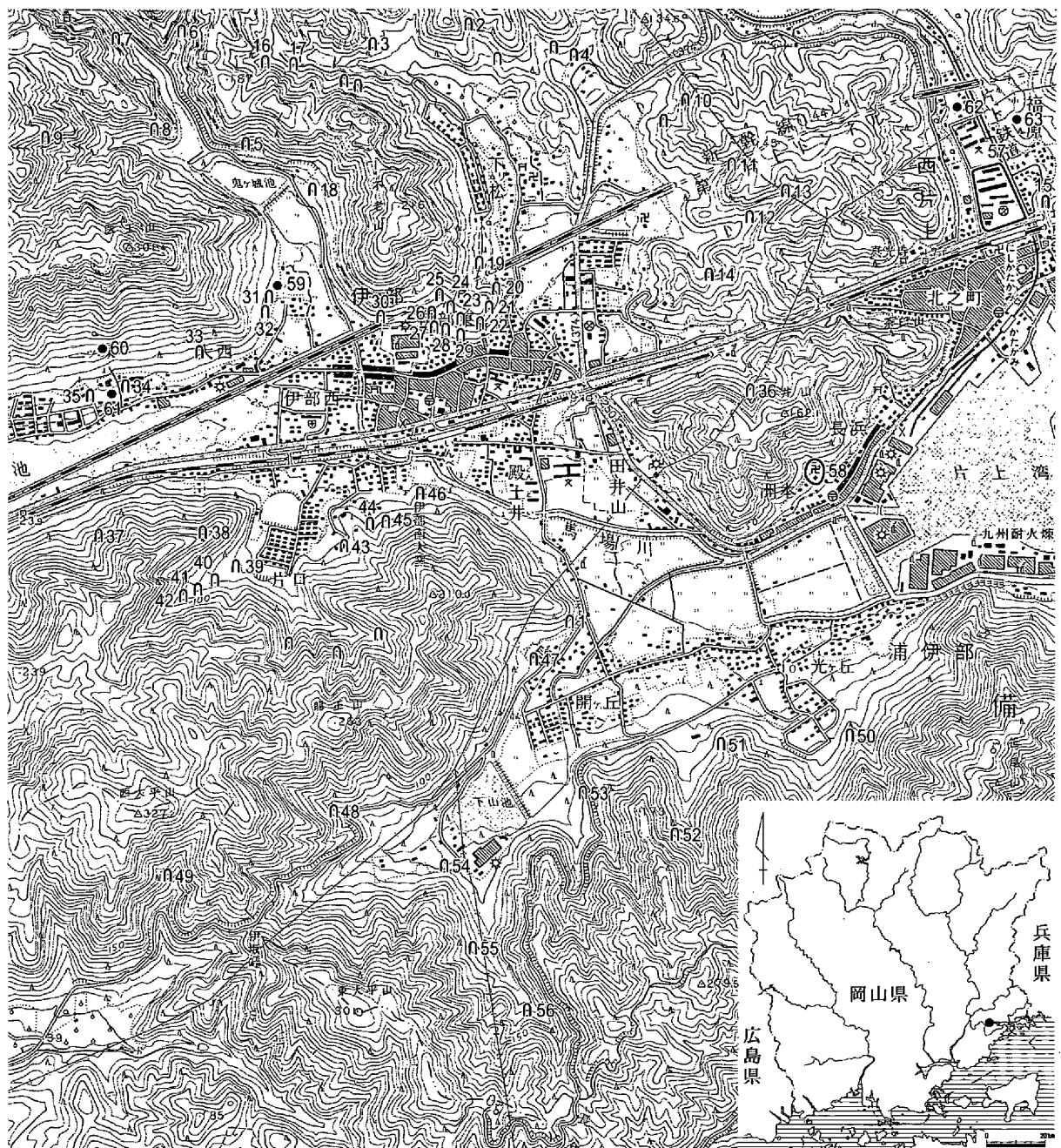
第2章 遺跡の位置と環境

山崎古窯跡は、JR山陽本線伊部駅より直線距離で南東約0.85km、龍王山裾部東向きに突出する丘陵の先端部やや南寄り、東側に片上湾を望む地点に位置する。旧山陽道南路より約1km南下した地点で、現在の行政区分では、岡山県備前市伊部に所在する。

山崎古窯跡が所在する備前市は、岡山県南東部と兵庫県との県境に位置する。この地域では中生代の流紋岩、石英安山岩、石英斑岩等の火山岩類が主に分布し、一部に古生層も含まれる。周辺地域は断層谷によっていくつかの地塊に分断されており、谷は直線的な方向性が認められるものが多い。特に流紋岩の山地では、直線状の谷の発達が著しい。この中で海に近い谷は、海面が上昇した際に沈水し、溺れ谷となり、多島海となった。片上湾はその典型である。穂波、片上、浦伊部、久々井、鶴見などには谷沿いに細長く開けた平坦地が窺える。これらの地点は、海水面上昇時の浸水が緩やかであり、浸食よりも堆積作用が優勢であったことから生じた埋積谷である。なかでも浦伊部は堆積が深く、底土は近年の備前焼原料粘土として利用されている。年平均気温は15度前後、年降水量は1100～1200mm程度の温暖寡雨地帯であり、典型的な瀬戸内型気候に属する地域である。

現状で確認されているなかで、備前市において最も古い人々の暮らしの痕跡を探し求めると、旧石器時代まで遡る。亀井戸廃寺確認調査の際にサヌカイト製ナイフ形石器及び翼状剥片が出土しており、これらの遺物は旧石器時代に属するものである。ただし、現代水田造成による搅乱が著しい地点において、土師器、備前焼等とともに出土しているため、他地点から混入した可能性も否めず、検討の余地は残る。続く縄文時代の遺物は、新庄西畠田遺跡、船山遺跡等で採集されているが、いずれも遺構に伴うものではない。弥生時代前期後半になると、船山遺跡で竪穴住居、大溝等が確認されている。この集落は中期中頃まで継続し、弥生時代終末期の遺構も存在する。古墳時代に入ると全長68mを超える前方後円墳長尾山古墳をはじめとする、当時の社会状況を考える上でも重要な古墳が築かれていく。

律令制下の備前市域は、当初邑久郡に属していたようである。後に郡の新設、改称等があり、『和名抄』の記載における和氣郡坂長郷、香止郷が備前市域にあたる。山崎古窯跡が所在する地点を含む香止郷内の平野は、白川天皇の勅旨田となり、次の堀河天皇の時、院領として立荘された。これが香登荘である。香登荘は焼き物の産地として古来より広く知られてきた。和歌山県西牟婁郡日置川町長壽寺境内から出土した大甕は、「歴応五年」の紀年銘とともに「備前國什人 香登御（床）」の銘を持つ。また、九州探題となった今川了俊の紀行『道ゆきぶり』（応永4年 1371年成立）には、「さてかがつといふさとは、いえごとに玉だれのこがめといふ物を作ところなりけり」と記載があり、室町期に成立したとされる『桂川地蔵記』の中でも、茶器の産地として「香香登、信楽、瀬戸壺」と地名があげられている。この他に重要な記載がある書物として、灯心草庵所蔵文書に『兵庫北関入船納帳』と称する帳面がある。ここには多くの「ツボ」等を積載した船が、浦伊部の港より1年間に21度にわたり兵庫北関に入港したと記載される。これは文安二年（1445年）の記録であるが、年代及び地理的にも山崎古窯跡との関わりが興味深い。香登荘近辺における焼き物生産は、窯の所在を移動しながら引き継がれていく。そして、一時は存亡の危機に瀕したこともあるようだが、21世紀にいたる現在においてもこの地において、備前焼としてその生産は続く。

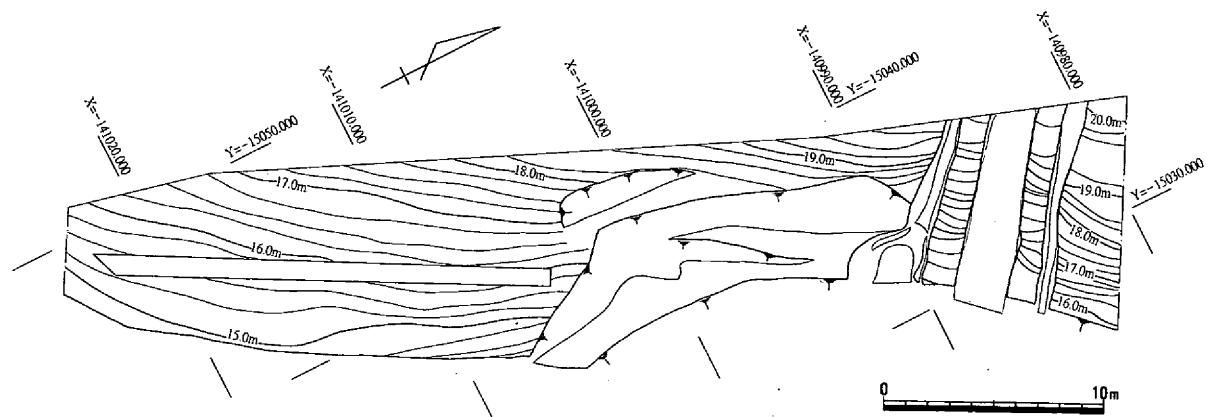


- 1 山崎古窯跡
- 2 横尾古窯跡
- 3 弁天口古窯跡（群）
- 4 小屋谷古窯跡（群）
- 5 下池堤（赤尾）古窯跡
- 6 合ヶ淵東谷窯跡
- 7 合ヶ淵古窯跡（群）
- 8 西谷口古窯跡
- 9 笹山古窯跡（群）
- 10 木場池南古窯跡
- 11 カニガ谷北古窯跡
- 12 カニガ谷古窯跡
- 13 カニガ谷東窯跡
- 14 カニガ谷上古窯跡
- 15 若林山窯跡
- 16 弁天上池古窯西1号
- 17 弁天上池古窯西2号
- 18 大明神窯跡（群）
- 19 不老山トンネル東口古窯跡（群）
- 20 不老山東端麓古窯跡
- 21 不老山東端麓明治窯跡
- 22 天津神社東古窯跡
- 23 伊部北大窯跡（南）
- 24 伊部北大窯跡群（北）
- 25 不老山南麓古窯跡（群）
- 26 尼寺跡古窯跡
- 27 黄薇窯跡
- 28 天保窯跡
- 29 忌部神社南西明治窯跡
- 30 不老山トンネル西口古窯跡（群）
- 31 医王山東麓古窯跡
- 32 西大窯跡
- 33 大西古窯跡
- 34 二つ塚東古窯跡
- 35 二つ塚西古窯跡（稻荷山古窯跡）
- 36 火葬場裏山古窯跡
- 37 大ヶ池古窯跡
- 38 ゴルフ場窯跡
- 39 瀬戸谷1号古窯跡
- 40 瀬戸谷2号古窯跡
- 41 瀬戸谷3号古窯跡
- 42 瀬戸谷4号古窯跡
- 43 長尾古窯跡（群）（姑耶山古窯跡（群））
- 44 窯の下西古窯跡（群）
- 45 窯の下東古窯跡（群）
- 46 伊部南大窯跡（群）
- 47 富士耐火裏古窯跡
- 48 下山竜王山南東麓古窯跡
- 49 一ノ谷窯跡群
- 50 光ヶ丘池古窯跡
- 51 茶畑古窯跡（浦伊部窯3号）
- 52 浦伊部南中の谷口窯跡
- 53 奥の谷口古窯跡（浦伊部窯2号）
- 54 下山古窯跡（群）
- 55 長谷古窯跡
- 56 長谷古窯跡（浦伊部窯1号）
- 57 西片上遺跡
- 58 妙圓寺遺跡
- 59 片山塚古墳
- 60 二つ塚古墳
- 61 二つ塚1号墳
- 62 六地蔵古墳
- 63 福原稻荷山古墳

第1図 調査地周辺の地形と主要遺跡 (1/25,000)

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要



第2図 調査区 (1/340)

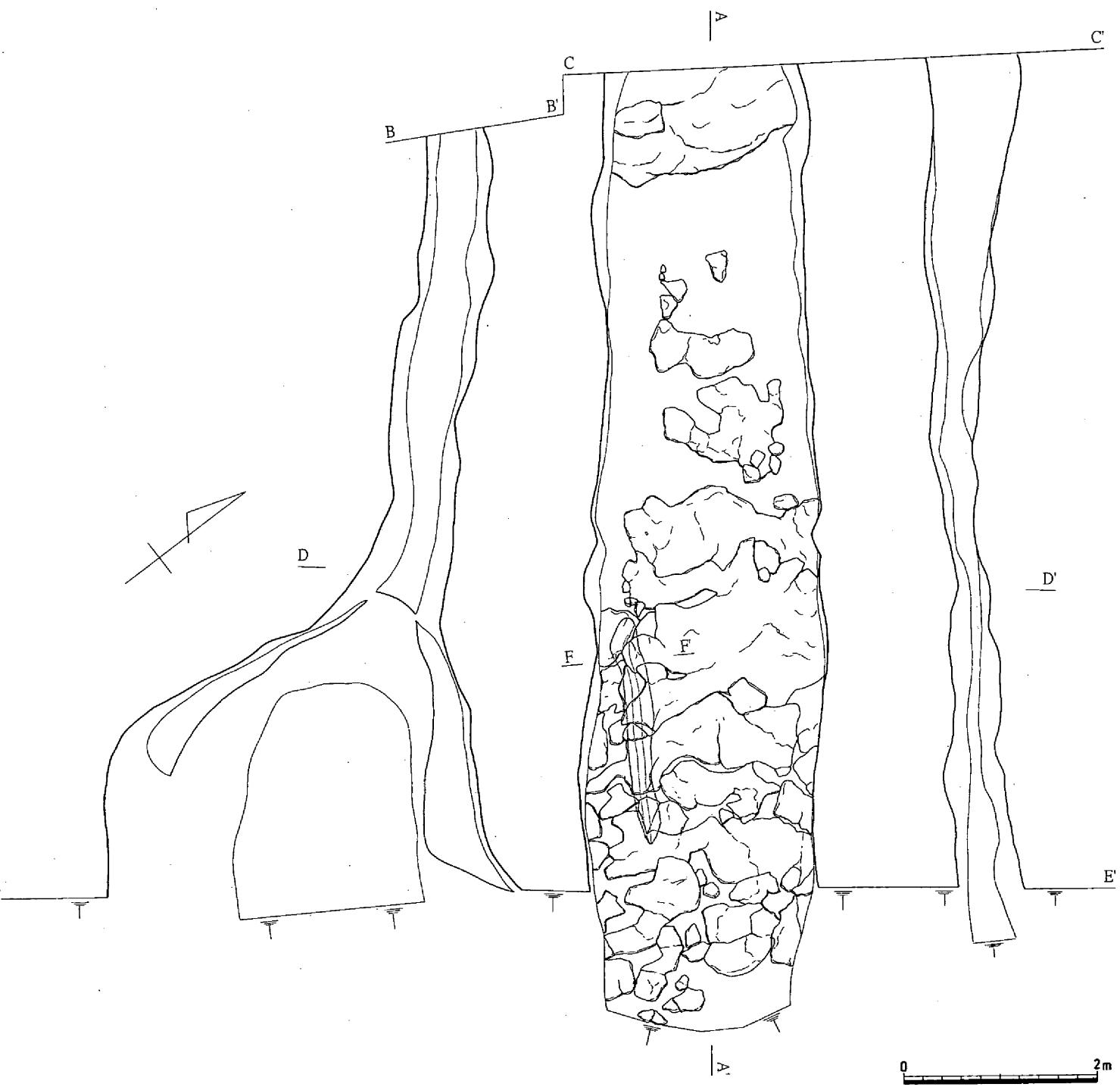
調査地は東に延びる丘陵の先端部、南東向き斜面にあたる。当地点には窯跡及びそれにともなう溝が存在することが記録に残っており、採集遺物も備前焼編年研究における一つの基準資料として利用されてきた。この度の調査により、窯跡の上半部とその両脇にそれぞれ溝を1本、つまり計2本の溝を検出した。遺物は陶片がコンテナ箱数に換算して11箱分、そして窯壁が多量に出土した。また、窯跡から南約18mのところ、やや平坦な地点に幅0.8m、長さ20m程度の試掘坑を設けたが、表土除去後直灰白(5Y 2/1)粘土層地山であり、遺構、遺物は確認できなかった。

第2節 遺構

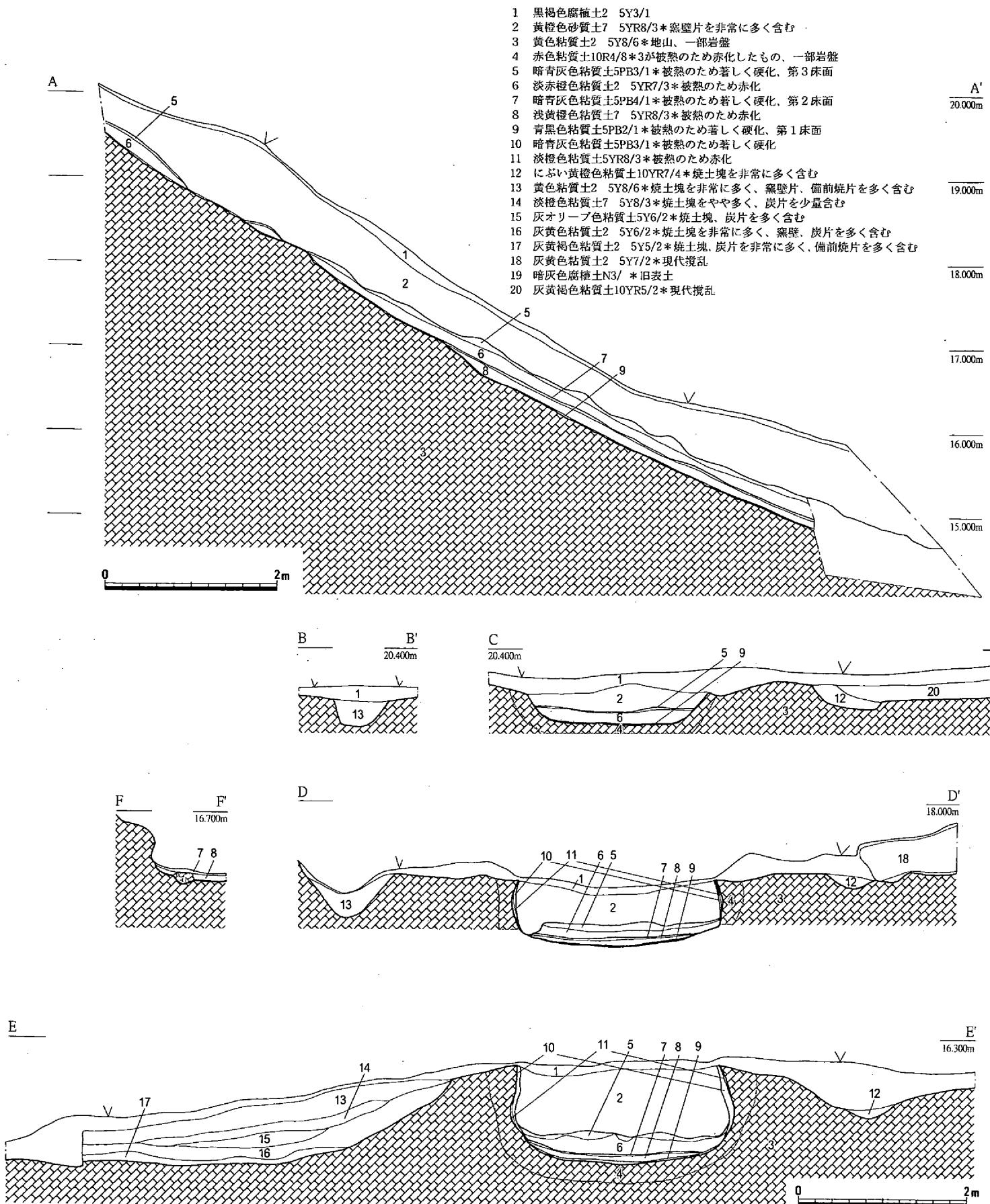
1 窯体

窯体は主軸を北西から南東方向にとり、丘陵斜面の等高線に直交して築窯されている。窯体の下半部は以前の道路工事により掘削を受け、現存しない。また、窯体上端部は改築工事予定範囲には入らず調査区外となるため、今回の調査では未確認である。ただ、調査区最上端付近において窯体床面の角度は急峻となり、幅もやや狭くなることからこの付近が煙道にあたると想定でき、調査区外の窯体未調査部分はあと僅かであると考える。確認した窯体部分の長さは、斜距離で11m、水平距離で9.94mである。幅は最大で2.54mを計るが、上部に近づくに従いやや狭まり、調査区最上部では2.12mとなる。確認した窯体直下、道路を挟んだ畑地に陶片、窯壁片が多量に散布する地点がある。この地点を窯の焚き口と想定すると、窯の推定全長は斜距離で20mをやや超える程度となる（註1）。

窯体内を掘り下げ、窯床面及び壁面を検出する際、多量の窯壁片が出土した。これは、壁面及び天井部が崩落したものと想定する。窯壁片には木あるいは竹を組み合わせていた痕跡が明瞭に残るもの



第3図 烹跡平面 (1/60)



第4図 窯跡断面 (1/60)

が多く、このことから、天井は竹等を利用してドーム状の骨組みを作り、そこに土を張り付けて形成していたと考える。

床面は3面確認できた。第9層上面を第1床面、第7層上面を第2床面、第5層上面を第3床面と呼称することとし、次にそれについて記述する。

第1床面は築窯当初の床面である。地山、岩盤を掘り抜き、そこに薄く粘土を貼って形成する。壁面は地山を掘り抜いた後に、部分的に粘土、石を利用しながら叩き締めて形成していた。これは、以後、何度も修復が行われたようで、検出した段階では非常に凹凸の著しい壁面となっていた。現存する壁面最高部から床面最深部までを計ると、1.16mであるが、窯体上部に登るほど浅くなり、最上部では0.5mとなる。この床面は、上部に向かう途中に2回程段を設け、そこを変換点としてその傾斜角度を変える。検出した下部より1回目の段までは25度前後で、そこから2回目の段までは32度となり、以後は35度となる。上部に向かうにつれ、その角度を急にすることがわかる。

第2床面を形成する際、まず、窯体下部から向かって左側を、第1床面上から一部溝状に掘り抜いている。さらに、そこには窯壁片や細かく碎いた礫を充填し、また部分的には甕胴部陶片をアーチ状に設ける。その後、第1床面上にやや荒い砂を敷き詰めてから粘質土第8層を貼り付け、その上にまた砂を敷いた後に第7層を貼り付けて形成する。その結果、溝状の掘り込みは暗渠となる（註2）。第2床面を形成するために、第1床面1回目の段まで粘質土を貼り付ける。残存壁面最高部から第2床面最深部までは1.06mを計る。床面傾斜角度は最下部付近は21度であるが、0.8m程上面に上がると26度となる。第2床面形成面より上部は第1床面と面をともにするため、傾斜角度も同一である。床面形成に使用された第8層は被熱により浅黄橙色となり、もろい土である。それに対し第7層は被熱のため暗青灰色となり、非常に硬質である。

第3床面は第2床面形成時と同様の行程により形成する。ただし、第2床面と比較すると貼り付ける粘質土が厚く、また、形成過程が雑な印象を受ける。被熱により暗青灰色となった第5層上面が第3床面となるが、非常に起伏が激しく、粘質土塊を貼り付けただけにも見える（註3）。粘質土は基本的には第1床面2回目の段まで貼り付けられ、その上部についても窯体中央部において部分的に貼り付けた様子が観察できる。ただし、第2床面形成時に作成された暗渠の上部には張り付けることはなく、水分をその暗渠に導くかごとく低いままにされていた。床面の角度は下部においては19度前後であるが、粘質土の起伏が顕著となる地点から27.5度になる。2回目の段より上面は基本的には第1床面と共に通するため角度も同一であるが、調査区最上部付近は粘質土を貼り付け、47.8度と急激に傾斜角度を上げた後、33度前後でさらに上部へと続していくようである。この付近は煙道に近いと考えられることから、これは煙の排出に際して何らかの工夫を凝らした痕跡であると推察する。

床面断面形は第1、2床面は窯体中軸付近が最も低く、浅いU字状を呈するが、第3床面は中軸付近が高く窯壁付近がやや低くなり、浅いW字状を呈するといえる。

註釈

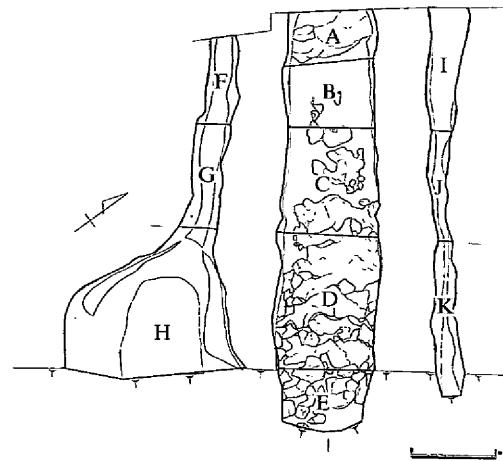
- 1 桂又三郎氏の『新設備前焼入門』には山崎古窯跡について「長さ十一間幅約二間の登窯」と記載あり、この数値とも矛盾しない（桂又三郎『新設備前焼入門』おかやま社1952）。
- 2 窯床下の暗渠施設は中世窯においていくつか確認されており、珠洲大畠窯の発掘調査報告の中で事例があげられている（宮沢京子「2 大畠1号窯（a）窯体」『珠洲大畠窯』富山大学考古学研究報告第6冊1993）。ここでは、暗渠の機能として排水を想定しているが、それ以外にも、あえて水を導き科学反応による爆発を誘発し、火力増幅を試みていた可能性も考えられるのではないかとの教示を得た（森山祐二氏（木村興樂園）の御教示による）。また、床面下の暗渠は古墳時代の須恵器窯でも確認できる。（大阪府教育委員会「陶邑Ⅰ～Ⅲ」『大

阪府文化財調査報告書】第28~30輯 1976~1978)

3 ただ、調査時はこの起伏が足をかけるのに都合が良く、階段の代わりの役目を果たした。起伏が激しいままにしてあるのは、あるいはこのような目的も兼ねていたのかもしれない。窯詰めの際に焼き物を置くにもある程度起伏があったほうが都合良く、その点も考慮に入れていた可能性もある。

2 溝

窯体の両脇において、それぞれ一本ずつ溝を検出した。窯体下部より向かって左側の溝は、検出範囲下半部において大きく広がる。この溝はやや掘削を受けてはいるものの、残りは良好である。それに対し、右側の溝は残りが悪く、溝としての形状が不明瞭な地点もある。これは掘削の影響も当然考慮に入れなければならぬが、築窯当初から左側と比較すれば狭く、浅い規模の小さなものであったと想定する。どちらの溝の埋土にも焼土、炭、窯壁片が含まれており、また陶片も出土している。特に左側の溝が広くなる地点で遺物は多く出土した。これらの溝は、本来窯体に侵入する水を防ぐ、排水を目的としたものであったと考えられるが、不要品等をその中に廃棄する場所にもなっていたようだ。



第5図 遺物出土地点区分 (1/180)

第3節 遺物

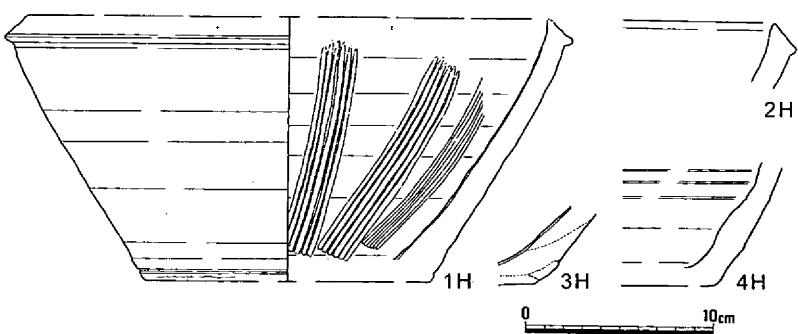
出土遺物について各層位ごとに述べる。実測図遺物番号横のアルファベットは出土地点を示す。出土地点の区分は第5図のとおりである。

1 溝出土遺物

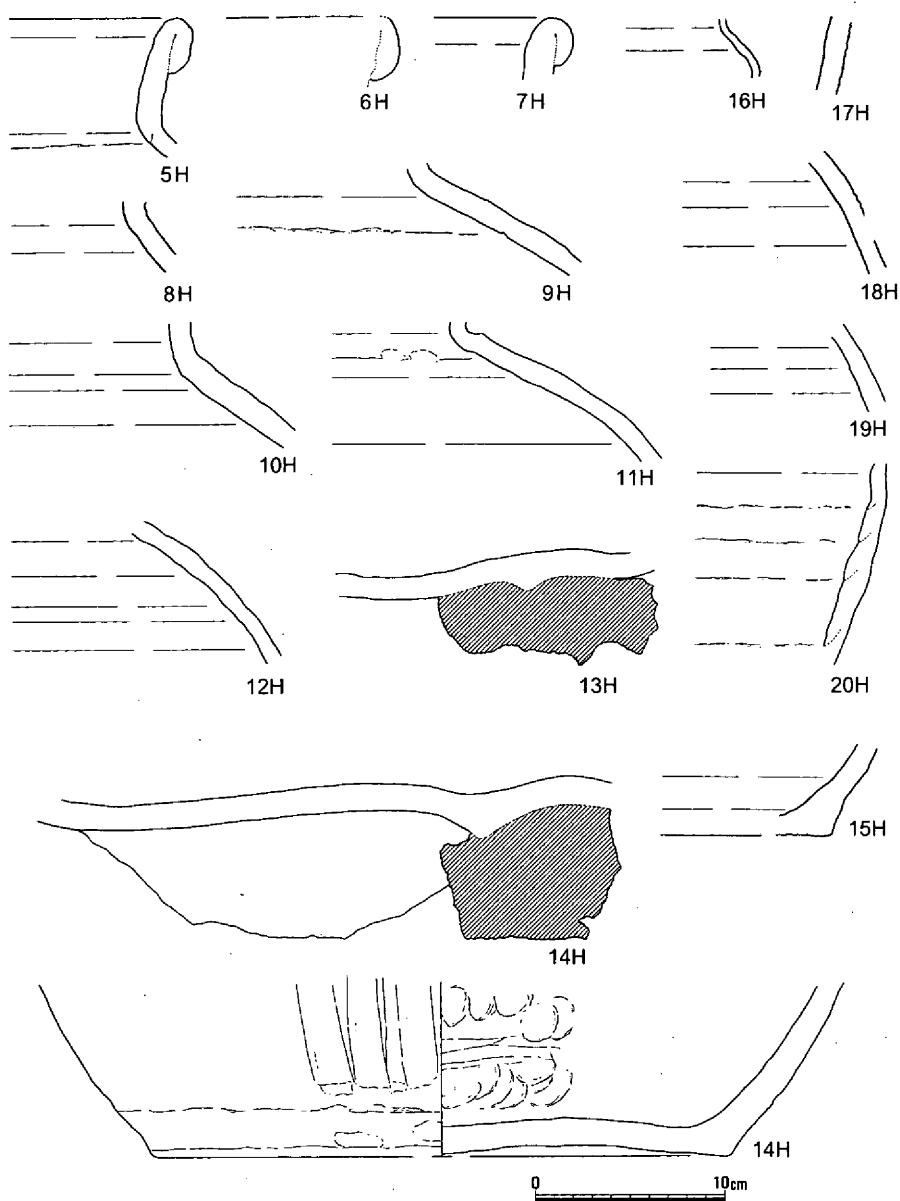
第1層

1~4は擂鉢である。1、2は口縁部を仕上げるにあたり、端部内側をつまむような形でヨコナデを行う。その際、端部外側寄りを強く押さえることにより、端部外側は突出する。その後、さらに端部内側のみをつまむ恰好でヨコナデを行い、突出した端部外側もヨコナデで仕上げる。この結果、内側が上方に延び、外側が下がった形状となる。3は底部片であるが、焼成軟質である。

5~15、17は甕である。5~7は口縁部を上方に引き伸ばした後、外面に折り曲げて、いわゆる玉縁状の口縁を形成する。断面形は外面やや偏平となり、長楕円形を呈する。7は焼成軟質である。9は外面ヨコナデ、内面板状工具によるヨコナデの痕跡が残る。11は外面ハケの痕跡をヨコナデで消し、内面は板状工具によるヨコナデ後、さらにヨコナデで仕上げる。13、14は底部であるが、焼成時の歪みが著しい。また、支えるために底部において粘土塊が溶着する。14の底面は不定方向のハケ、外面は底部立ち上がり付近をヨコナデ後、上から下方向



第6図 第1層出土遺物① (1/4)



第7図 第1層出土遺物② (1/4)

第13層

22~31は壺である。22は口縁部を折り返し玉縁にする。その後ヨコナデで仕上げるため玉縁は偏平、断面長楕円形となる。23も口縁部を折り返し、玉縁を形成する。25~30は肩部片で、櫛描き沈線文が確認できる。31は外面底部立ち上がり付近は回転ヘラケズリで仕上げ、その上部では縦方向の板状工具によるナデをおこない、その後ヨコナデで仕上げる。内面は指押え後ヨコナデを行う。

32、33、37は小壺である。32、33はおそらく注口を持つものである。37は残存部から判断する限り、算盤玉のような体部に短く直口あるいは外反する口縁が着く器形であると考える。胎土が非常に精緻で、他の出土品に類似した胎土あるいは焼成のものがいため、混入品である可能性も残る。

34~36は擂鉢である。34は口縁部内側をつまむ形でヨコナデを行う。その際、端部外側寄りを強く押さえることにより、端部外側は突出する。その後、さらに端部内側のみをつまむ恰好でヨコ

への板状工具によるナデで仕上げる。内面はタタキ痕が残るが、多くはヨコナデによりなで消されている。17は外面に平行タタキ痕、内面に円形あて具痕が残り、他の出土遺物より古い様相を示す。混入品の可能性が高い。

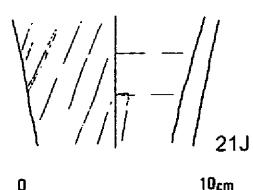
16は小壺の肩部小片である。18~20は壺である。18、19は肩部にあたり、櫛描き沈線文が施される。20は粘土紐の単位が明瞭に残る。

この他、破片ではあるが、擂鉢少量、甕やや多く、壺少量、炭片、近世陶片が出土した。

第12層

21は小片のため、器種、傾きに検討の余地が残る。花瓶か。

この他、壺小片等が出土した。



第8図 第12層出土遺物 (1/4)

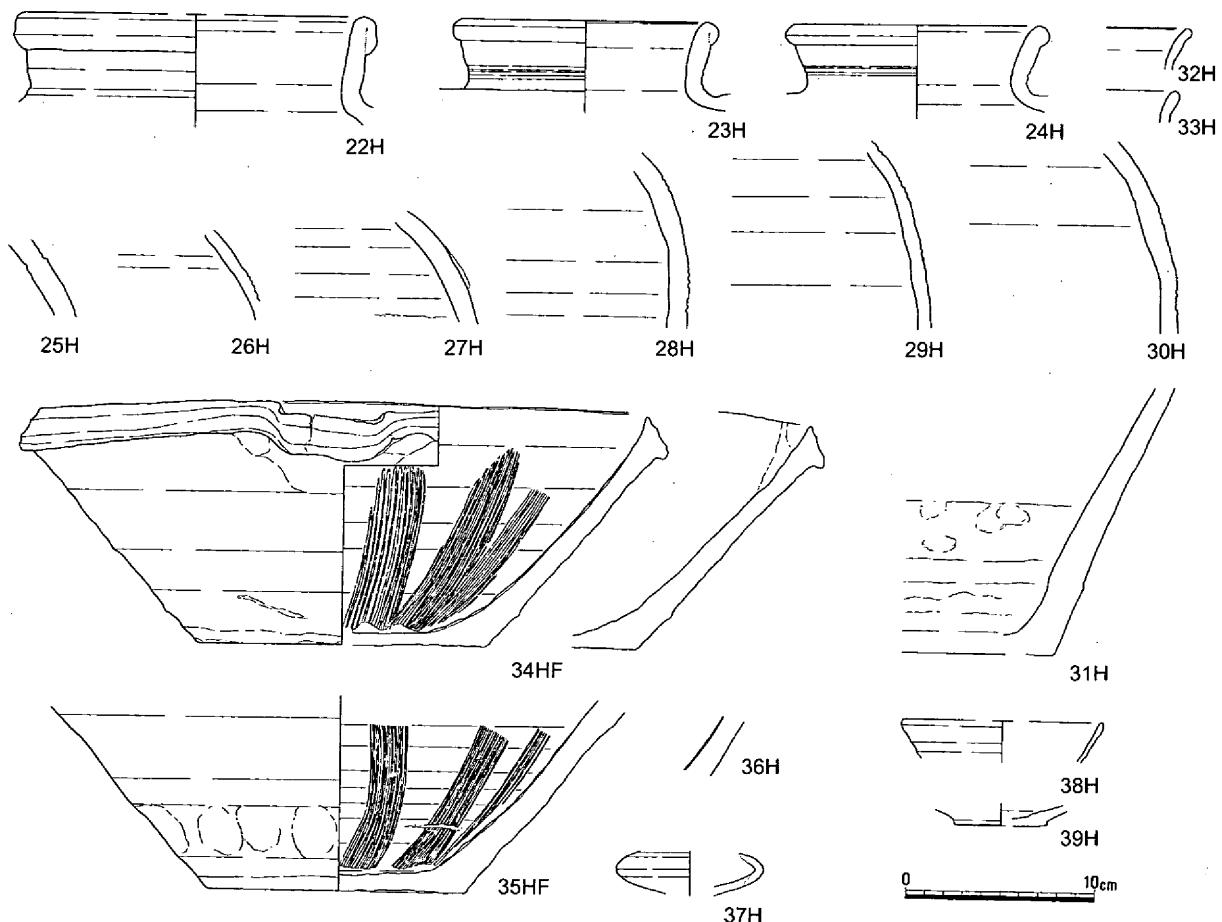
ナデを行い、鋭く仕上げ、突出した外側もヨコナデで仕上げる。注口は外面から片方の手の親指と人さし指で押え、内面からもう一方の手の指で押し出して形成する。内外面ともにヨコナデで仕上げ、底面は未調整である。外面には轆轤から取り上げる際使用した竹ヒゴの痕跡、持ち上げた指の痕跡が残る。底部内面には、重ね焼きの際の溶着物が観察できる。35は底部外面やや上において、工具による圧痕が確認できるが、その後のヨコナデのため不明瞭である。底面には下駄印痕が残る。

40～51は甕である。42は折曲げて玉縁状の口縁を形成した後、ヨコナデを行う。そのため、口縁端部は断面長楕円形となる。40、43はヘラ状工具による線刻が確認できる。44は外面玉だれの痕跡があり、内面はヘラ状工具の当たり痕が確認できる。45～48は外面にハケ調整の痕跡が明瞭に残る。48は外面底部付近をヨコナデした後、縦方向のハケ調整を行う。51も外面底部付近をヨコナデした後、板状工具による縦方向のナデで仕上げる。49は焼成軟質である。50は焼き歪みが著しい。

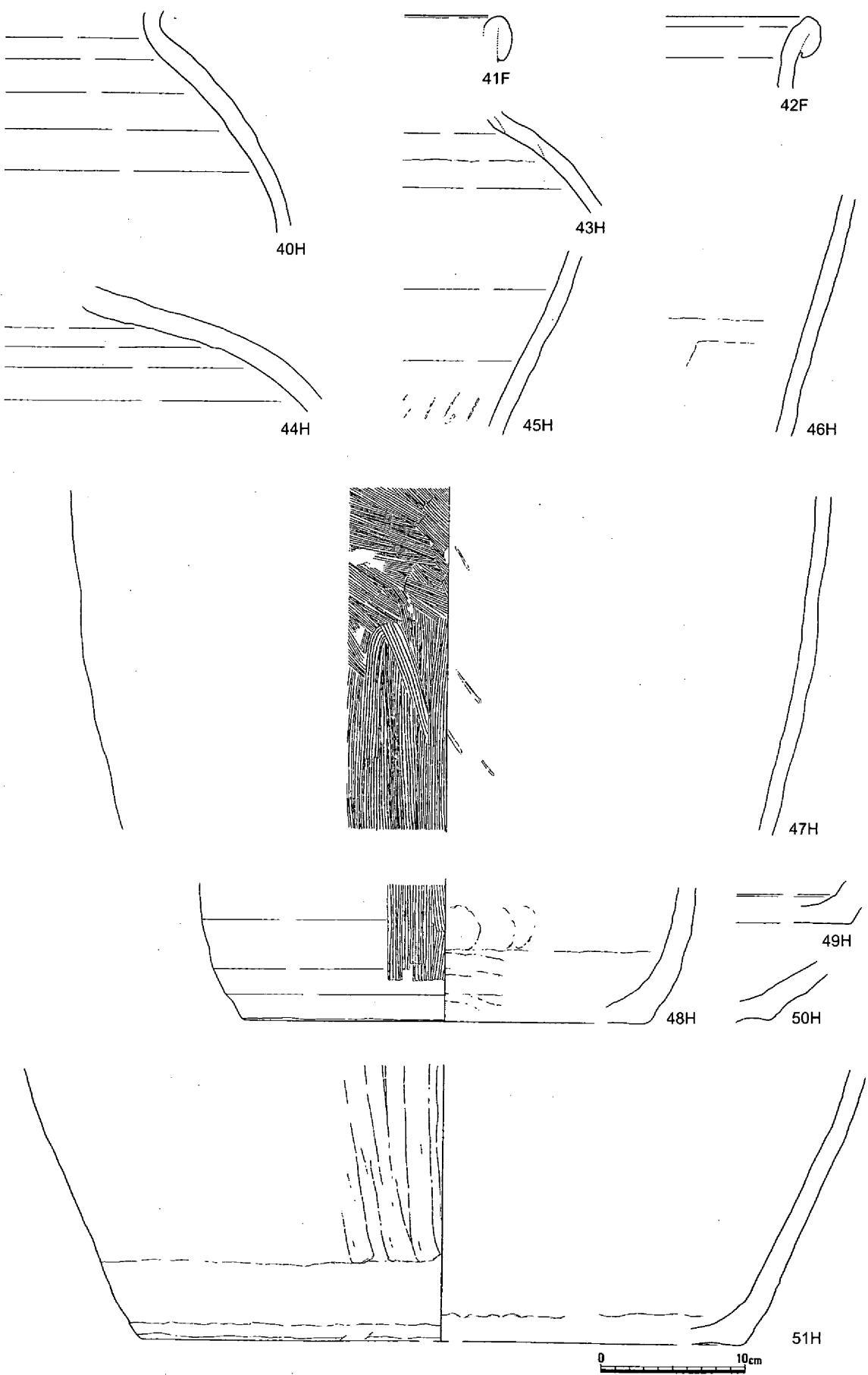
この他、破片ではあるが、擂鉢少量、甕少量が出土した。

第16層

52、53は擂鉢である。52は口縁部内側をつまむ形で、轆轤回転の遅いヨコナデを行う。このときは端部やや外側寄りを押さえているが、その後、さらに端部内側のみを小さくつまみながらヨコナデで仕上げる。底部外面はヘラケズリを行った痕跡が観察できるが、底面は未調整である。53は52と同様の過程により口縁部を仕上げるが、ヨコナデの際、52よりさらに外側寄りを押させていたため端部外側は突出する。突出した部分についてもヨコナデで仕上げる。



第9図 第13層出土遺物① (1/4)



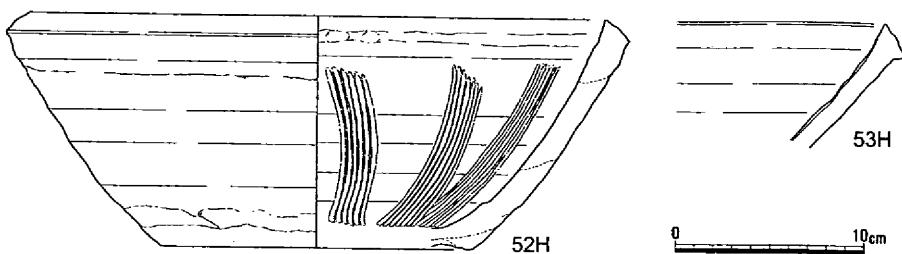
第10図 第13層出土遺物② (1/4)

第17層

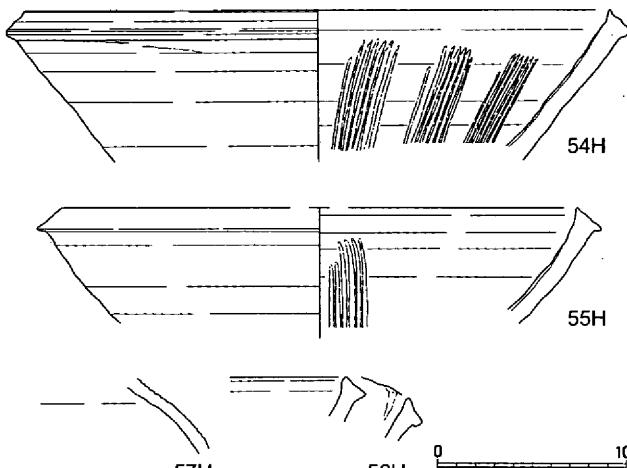
54～56は擂鉢である。54は口縁部内側をつまむ形でヨコナデを行う。その際、端部外側寄りを強く押さえることにより、端部外側は突出する。その後、端部内側のみを小さくつまむ恰好でヨコナデを行い、突出した端部外側もヨコナデで仕上げる。結果、端部は上方へ鋭く立ち上がる形状となる。注口付近である。55は54と同様の過程で口縁部を仕上げるが、端部外側の突出部分は強いヨコナデを行い、細く鋭く突出する。注口付近の破片である。56は注口付近小片である。

57は壺肩部片である。櫛描き文が残る。

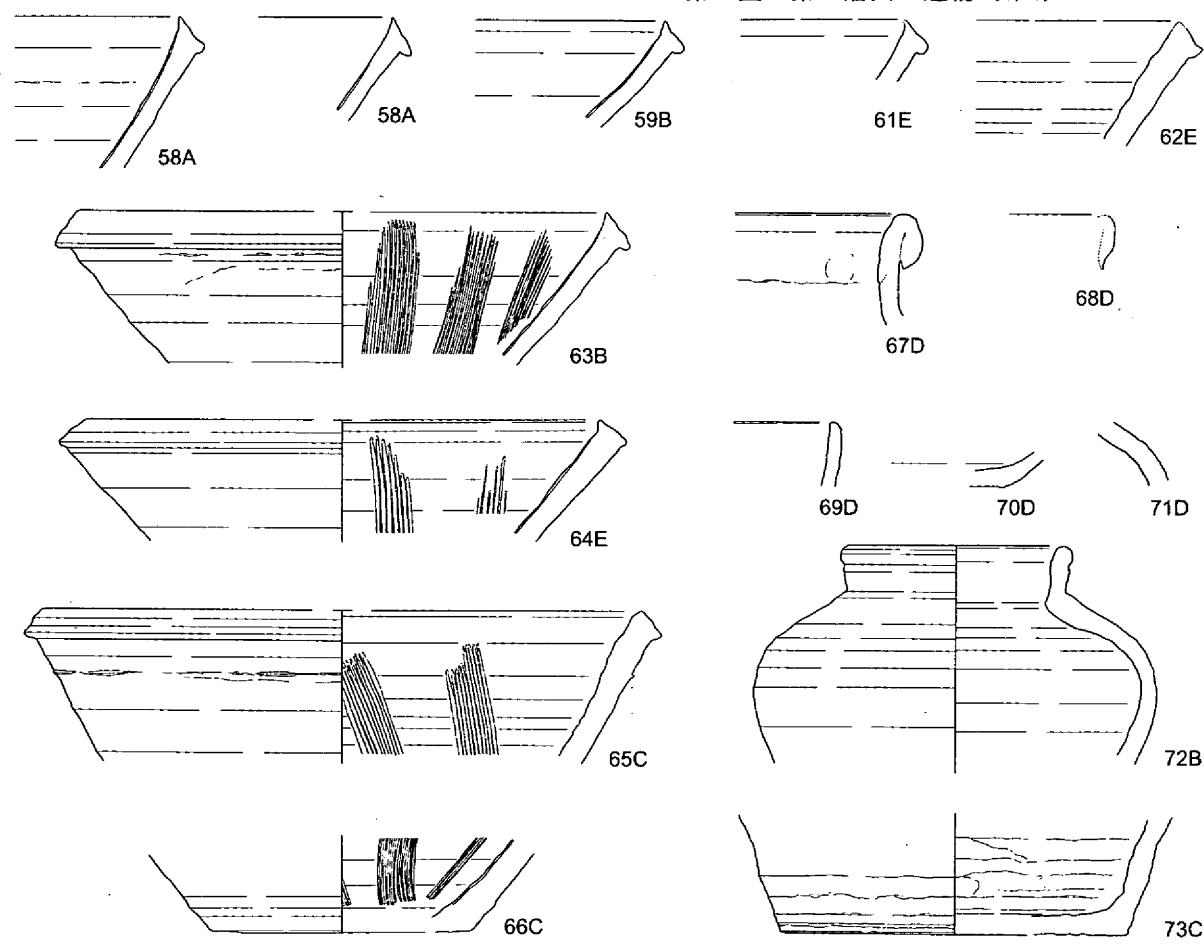
この他、壺及び甕の小片、炭片が出土した。



第11図 第16層出土遺物 (1/4)



第12図 第17層出土遺物 (1/4)

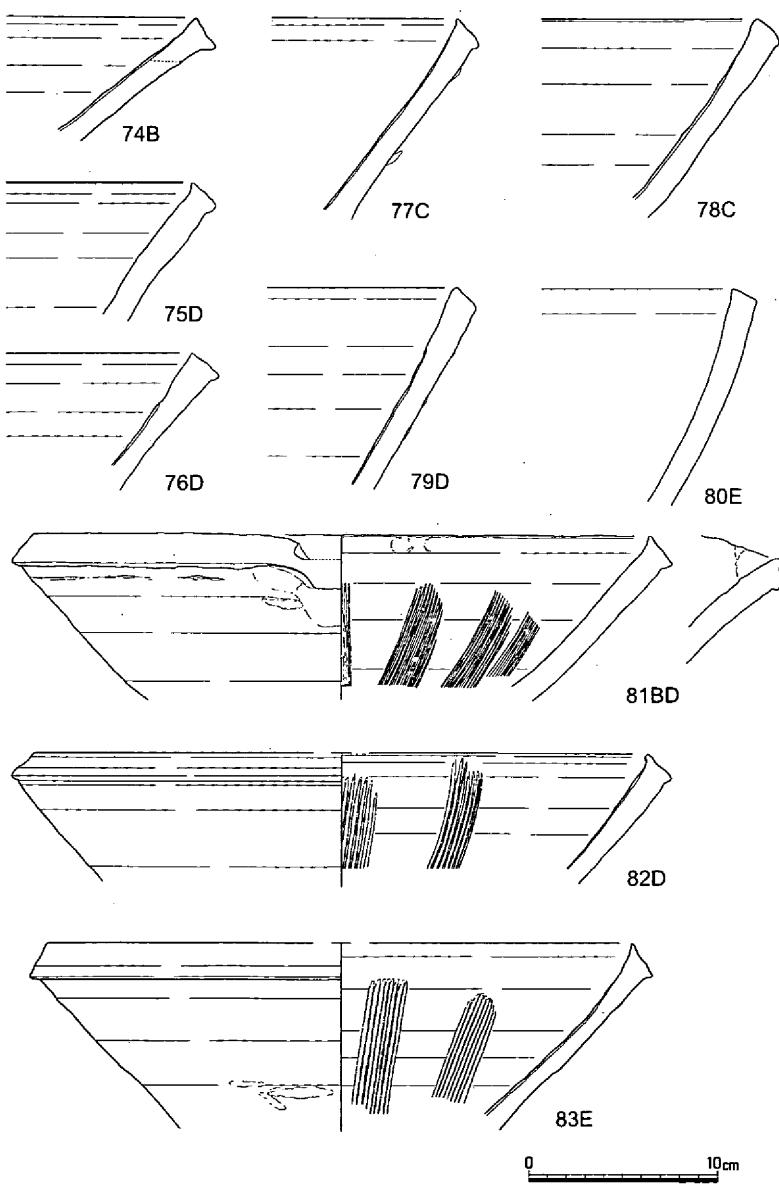


第13図 第2層出土遺物 (1/4)

2 窯体出土遺物

第2層

58～66は播鉢である。58は口縁部内側をつまむ形でヨコナデを行う。その際、端部外側寄りを強く押さえることにより、端部外側は突出する。その後端部内側のみをつまむ恰好でヨコナデを行い、突出した端部外側も丁寧なヨコナデで仕上げる。結果口縁部は上方へ鋭く立ち上がる形状となる。59～61、63、64も同様の過程において口縁部を形成したと考えるが、59、63は口縁部外側が他より鋭く突出することから、この部分のヨコナデが特に強く行われたことが窺える。また、64は内側のみをつまみながら特に強いヨコナデを行うため、内面に明瞭な稜を持ち、端部内側が短く立ち上がる。この64及び63は内面に多くの焼土が付着し、外面には自然釉、溶着痕が確認できることから、焼台として二次利用されていたと考える。62、65は口縁部内側をつまむ形でヨコナデを行う。その際、端部やや外側寄りを強く押さえることにより外側が押しつぶさる。そのため、口縁部が外側に屈曲した形状となる。62、65は、色調、胎土も類似した印象である。



第14図 第3床面床面出土遺物 (1/4)

67～68は甕である。67は端部を上方へ引き伸ばした後に折曲げて玉縁を形成し、その後ヨコナデで仕上げる。玉縁は断面長楕円形を呈する。

69はこね鉢口縁部、70は同じく底部であると考える。

71～73は壺である。71は肩部小片である。櫛描きによる紋様を施した後、その上下を板状工具によるヨコナデで揃える。72は口縁端部を玉縁状にし、肩部は板状工具によるヨコナデで仕上げる。73内面には横方向のナデ、外面底部立ち上がり部分には回転ヘラケズリの痕跡が残る。底面未調整である。

この他、甕の破片が多く、播鉢片が小量出土した。

第3床面

74～83は播鉢である。いずれも口縁部付近の破片であり、それぞれの形態及び成形技法について述べる。74は口縁部内側をつまむ形で輶轡回転の遅いヨコナデを行った後、通常のヨコナ

デを行う。このとき、端部外側が強く押さえられたため突出する。75は端部内側をつまむ形で74同様轆轤回転の遅い押圧気味のヨコナデを行う。その後、端部内側のみをつまむ恰好で通常のヨコナデを行う。76は口縁部内側をつまむ形でヨコナデを行う。その際外側寄りを強く押さえることにより、端部外側は突出する。その後、端部内側のみをつまむ恰好でヨコナデを行い、突出した端部外側もヨコナデで仕上げる。81、83も同様の過程により口縁部を成形するが、内面の指をあてる位置がやや下り、端部外側を押す力も強くなる。そのため、内側は上方へ鋭く立ち上がる形状となる。

この傾向は83により強く窺える。また、83は端部外側が鋭く突出することから、この部分も他より強いヨコナデが行われていたことがわかる。77、82は口縁部内側をつまむ形で、端部外側を強く押さえながらヨコナデを行う。そのため、端部外側はやや突出するが、この部分もヨコナデで仕上げる。その後、端部内側のみを強くつまむ恰好でヨコナデを行うため、内面に明瞭な稜を持ち、端部内側は短く立ち上がる形状となる。82が立ち上がりが明瞭であるのに対し、77は仕上げが雑な印象を受ける。78は口縁部内側をつまむ形で、端部やや外側寄りを強く押さえながらヨコナデを行う。このため、74～77、81～83ほど明瞭ではないが、外側が突出する。結果口縁部が肥厚した形状となる。79は口縁部内側を軽くつまむ形でヨコナデを行う。端部外側には明瞭な稜が残る。80も同様であるが、より端部の稜が鋭利である。75～83は内面に焼土、外面に自然釉、溶着物が観察できることから、焼台として二次利用したと考える。78～80は特に著しいため、他より長期間使用された可能性が高い。81は3地点で出土した破片が接合した。

この他、B、D、E地点で内面に焼土、外面に自然釉及び溶着物が観察できる甕胴部片が多量に出土した。焼台として二次利用されたと考える。また、各地点において壺、擂鉢等の小片も出土した。

第5層

84、85は擂鉢である。口縁部内側をつまむ形でヨコナデを行う。その際、端部外側寄りを強く押さえることにより、端部外側は突出する。その後、端部内側のみをつまむ恰好でヨコナデを行い、突出した外側もヨコナデで仕上げたと想定するが、二次的な被熱による歪みが著しいため、正確な成形技法は不明である。第3床面形成の際、補修のための粘土に練り込まれていたものと考える。

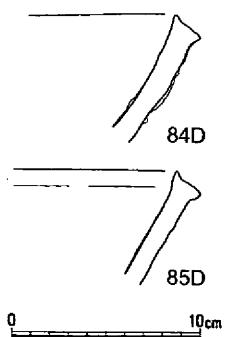
この他、C～D地点で甕胴部小片が少量出土した。

第6層

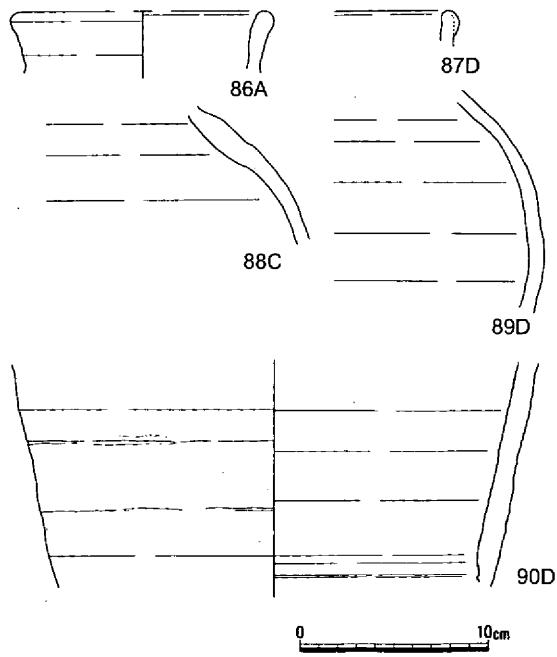
86、87、90は壺である。86は端部をヨコナデで仕上げ、丸くおさめる。87は端部を上面に引き伸ばした後、折り返し玉縁を形成する。歪みが著しい。90は内外面ともにヨコナデで仕上げる。外面にはハケ状工具の当たり痕、内面は指の痕跡が残る。

88、89は甕である。内外面でヨコナデを看取した。

この他、D地点で壺、甕胴部片が多く出土した。



第15図 第5層出土遺物 (1/4)



第16図 第6層出土遺物 (1/4)

第4章 まとめ

はじめに

ここでは、今回の調査で出土した備前焼の制作時期について言及することを目的とする。そのためには、中世備前焼の型式組列を把握しておくことが必要不可欠であり、また、それは中世備前焼研究における最も基礎的な作業である。出土遺物を分類し、その形状、特徴についていくら詳細に述べたとしても、この基礎的な作業を欠いた段階では、果たして、中世備前焼研究の中においてそれがどのような意味を持ち得るのか、あるいは全く無意味な作業を進めているだけなのか、それすら検証することができない。時期、出土地点等あらゆる意味で限られた今回のような資料を扱う場合、無意味な分類、着目点が一定しない事象の羅列等、研究上で全く何の貢献も果たさない作業を推し進めてしまう危険性がより高い。よって、中世備前焼型式組列における、私自身の現段階での理解について記述することからはじめる。

型式分類を行うにあたり、ここで取り扱う資料について明記しておく。冒頭にも述べたように、この章の目的は、山崎古窯跡出土備前焼の制作時期について言及することにある。そのため、自然科学的年代測定、文献等で実年代が明らかな窯跡出土資料を基に分類を行う、とするのが理想ではあるが、備前焼窯跡は発掘調査が行われた事例が少なく、現状の資料では、その作業は不可能と言わざるを得ない。よって、集落遺跡等の消費地において土師器等とともに出土した資料、または、紀年銘が確認できる資料を抽出し、それを基に型式分類を行った。その結果、広島県福山市草戸千軒町遺跡出土の資料を中心として取り扱うことになった。

型式分類は、主に播鉢口縁部の変化に注目して行う。これは先学の研究、特に間壁忠彦、間壁葭子両氏の研究に拠るところが大きい。備前焼の型式分類、編年は間壁両氏により確立され、その後の備前焼に関する考古学的研究は、全て両氏の研究を拠り所としてきた。伊藤晃氏、平井泰男氏、乗岡実氏らも編年案を提示するが、つまるところ、いずれも間壁両氏の研究を基にしたものであり、また、そのことはそれぞれの文章中にも明記されている。以後述べる分類は、間壁氏の分類、編年に対する自分なりの理解を示したつもりであるが、場合により、間壁氏の分類と齟齬を来す部分、または、意図に反する部分があるかもしれない。その場合の責はすべて私自身にあることは、改めてここで述べるまでもないことであろうが、あえてここに記しておく。

中世備前焼の分類

次に分類した各型式ごとに特徴を述べる。その時、間壁両氏が、設定した時期を説明する際に使用した記号、I～Vを流用する。間壁両氏はそれぞれの時期をさらにA、Bと二分しているが、その中でさらに分類を行う際は、1から順にアラビア数字を付けることとする。

確認できたI期に属する資料は僅かである。間壁氏の提示した資料を見る限り、この期の壺、甕は口縁端部を丸く収めていたものが、上から強く押さえながらヨコナデを行うことにより、端部を外側に引き出すものへと変遷していく傾向が窺える。42の口縁端部は外側に引き出され、上面にややくぼんだ平坦面を持つ。これはI期の中でも後出する様相である。碗は体部と底部の境に明瞭な屈曲を持ち、底部は高台状となる。糸切り痕が明瞭に残る。13世紀前半の土師器を伴う。

Ⅱ A期の擂鉢は端部外側を強くヨコナデした後、端部内側をつまむ恰好でヨコナデを行う。そのため、端部外側は鋭く、やや上方に跳ね上がった印象となる。器壁は薄く、色調、胎土は須恵器と類似する。壺、甕は、Ⅰ期より口縁部ヨコナデの際つまむ量が増え、端部が屈曲した形状となる。その後、さらに、端部下端をヨコナデで強く押しつぶようになり、結果、口縁部は端部を巻き込む形状となる。碗は、底部が丸みを帯び、体部と底部の境が不明瞭となる。底部は糸切り後ナデで仕上げるため、糸切り痕は不明瞭である。13世紀前半から13世紀後半の土師器を伴う。

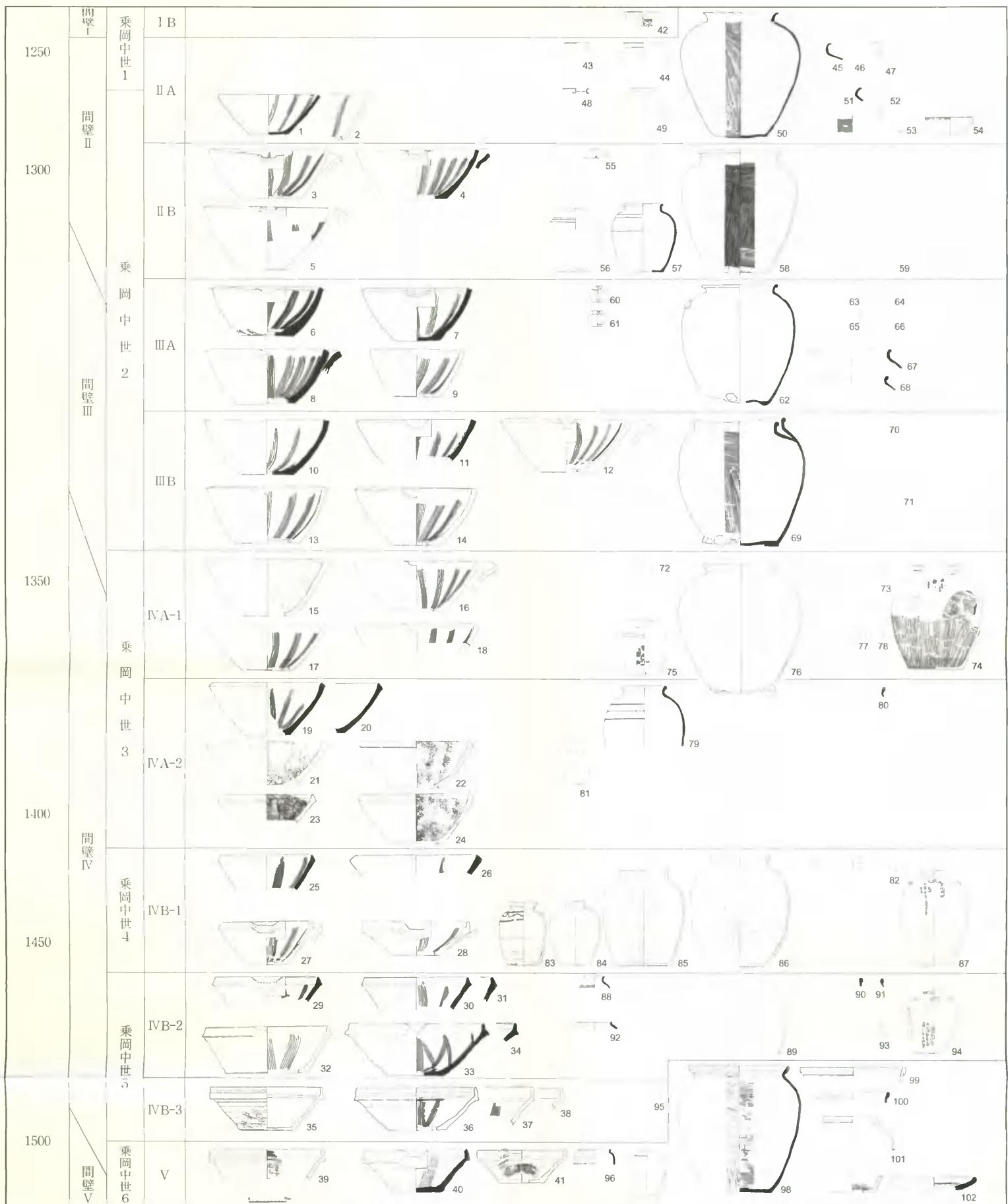
Ⅱ B期の擂鉢は端部外側をつまみながら、あるいは軽く押さえながらヨコナデを行った後、内側からつまむ恰好でヨコナデを行う。そのため、端部外側がやや突出した印象を受けるもの、丸く収められたものが存在する。端部内側はいずれもやや突出する。端部上面は丸みを帯びる。Ⅱ A期のものより器壁が厚い。この期の前半段階までは須恵質のものも多いが、自然釉が多く付着し、褐色や黒に近い色となるものも確認できる。後半段階になるとさらに器壁は厚くなり、端部上面も広くなる。壺、甕は口縁端部の巻き込みをさらに強め、いわゆる玉縁状の口縁部が出来上がりつつある時期である。前半は14世紀前半の土師器を伴い、後半は14世紀中頃でも古相の土師器を伴う。

Ⅲ A期の擂鉢は端部上面に平坦面を持つ。前半段階はⅡ B期のものと同様の形成過程により仕上げたと考えるが、最終的に、端部上面を均一に押圧しながらヨコナデを行う。結果、口縁部は「平らに切った形」となる。後半段階になると、端部外側をつまみながらヨコナデを行うことはなくなり、外側に端部が突出することはない。甕の口縁部は玉縁状となる。玉縁下半部を強くなることにより面を持つもの、外面に平坦面を持つもの等存在するが、断面正円形に近いものが多い。14世紀中頃の土師器を伴う。

Ⅲ B期前半の擂鉢は口縁端部上面が平坦であり、端部外側は明瞭な角を持つ。その角がやや丸みを持つもの、鋭利なもの等形態種が存在するが、端部外側が突出せず、明瞭な角を持つということで、とりあえずひとまとまりと考える。後半になると、口縁端部内側からつまむ恰好でヨコナデを行う際、端部を押さえる位置が外側寄りとなり、端部外側が突出する。そのため、端部外側突出部分の下には、不均一な稜線が入る。Ⅲ期は胎土が非常に精緻な印象を受ける資料が多いが、この後半段階より胎土に礫を多く含むものが増加する。甕の口縁部は、断面正円形に近い玉縁状となる。Ⅲ A期と比較すると玉縁が大型化する傾向にある。14世紀中頃の土師器を伴う。

Ⅳ A-1期の擂鉢は体部が直線的に開くものが増加する傾向にあり、口縁端部は、いわゆる拡張した印象を受ける形状となる。口縁端部内側からつまみながらヨコナデを行う際、より外側を押さえるようになる。その結果、端部外側は明瞭に突出する。その後、端部内側のみを小さくつまむ恰好でヨコナデを行い、短く上面に引き上げる。後半段階になると、その傾向はより明確となる。壺の口縁部は小さな玉縁状を呈する。甕の口縁部は、折り曲げる量をより増加する傾向にある。そのため、口縁部玉縁の断面形状は長楕円となる。14世紀中頃でも新しい段階の土師器を伴う。

Ⅳ A-2期の擂鉢は口縁部を内側からつまむ恰好でヨコナデを行う際、より端部外側を強く押さえ、端部内側の押さえる位置も下方に下がる傾向にある。これは、口縁部を上方へ引き上げる意図が、明確に行行為に表れ始めた結果と考える。内面に明瞭に屈曲を持つもの、内側に湾曲気味に立ち上がるものとが存在するが、前者が新しい傾向であると想定する。押しつぶされることにより突出した端部外側は、強いヨコナデで仕上げるもの、押しつぶして丸く収めるもの等が存在する。甕口縁部玉縁の断面形は扁平な長楕円形となる。壺が大型のものと小型のものに明確に分化するのも、この時期の前後



草戸千軒町 1975 SK755 8、67 1975 SK790 68 1976 SE977 50 1977 SE1150/102 1977/SE1186 4 1978 SE1297 33 1978 SE1371 69 1979 SD560 25 1979 SK1370 79
 1980 SK1890 19 1980/SK2200 57 1981 SD2070/26 1981 SK2320 31、90、91 1981/SX2400/62 1981/SD2450 1 1982 SE2640 51 1982 SE2721 34 1985 SD3130 30、92
 1985/SD3139/100 1985 SG2742/48 1986 SD3457 45 1986 SK3448 11 1987 SD3858 80 1987/SD3860 7 1987 SD3890 29、88 1987 SK3710 6 1988 SK4125 96
 1988/SX4167/10 1990/SE4820/20 I/SD1170 17、82 I/SE1015 53 I/SE976 46 I/SK1300/12、70 I/SK990 16、72、73 II/SD2022 54 II/SD3190 3、47、58
 II/SD510 89 II/SD585 38、95 II/SDX90 55 II/SK1790 75 II/SG2741 2、49、52 II/SK1370/76 II/SK3160 27 II/SX2811 32、93 III SG3060/18、77、78
 III/SG3840/14 III/SK3456/13 III/SK3600 9 III/SK4313/71 IV/SG4415 5、56、59~61、63~66 IV/SK4730、4731 37

楠葉野田西 下村1999 53次/53 横須賀市 堺環濠都市 堺市41 SK388/21 堺市41 SK595 15 堺市41 第6層/22~24、81

鹿田 I / 岡大3/井戸29/42~44 首里城 沖縄県132/SK01/28、83~86 大内館/IV/11号土壙 36

山科本願寺 京都市9/SD66 40 京都市9/SF3 98 湯葉城 愛媛県66 SB203 39、41、97、99、101

長壽寺 / 内川2001/1342年 / 74 年銘調査 / 備前市1998/1444年 / 87 備前市1998/1480年 / 94

*遺跡名/シリーズ名または執筆者/出土遺構/掲載番号の順に示す

第17図 消費地出土備前焼型式分類試案（壺・甕1/25、その他1/10）

と考える。14世紀中頃でも新しい段階の土師器を伴う。また、大阪府堺市堺環濠都市の発掘調査で応永の焼土層（1399年）出土とされている資料も、この期に含む。埼玉県富士見市針ヶ谷遺跡において、1368年銘の板石塔婆とともに出土した擂鉢もこの期の前半に含む。

IV B-1期の擂鉢は体部がさらに直線的に開く。そして、口縁部は立ち上がる形状となり、内面には明瞭な屈曲部を持つ。これは、端部を形成するヨコナデを行う際、内面を押さえる位置がさらに下方に下がった結果である。端部外面が全く突出しないもの、突出部分を下方から押し上げながらヨコナデを行うもの等の形態種が確認できる。甕の口縁部玉縁の扁平化が進む。15世紀前半から後半の土師器を伴う。また、1456～1459年を下限と想定できる沖縄県沖縄市首里城出土資料もここに含む。

IV B-2期の擂鉢は内面屈曲部の位置が下がり、口縁部の立ち上がりはますます顕著となる。甕口縁部は断面扁平な長楕円形を呈し、ほぼ直立するものが多いようであるが、頸部が短く、口縁部がやや内傾するものも一定量この時期には存在する。水屋甕の初現とも言えるような器形が存在する。15世紀末頃の土師器を伴う。

IV B-3期の擂鉢は口縁部が均一な厚さで上方へ立ち上がる。端部は丸く仕上げる。この時期以後、胎土は砂粒が目立たない、非常にきめ細かなものとなる。15世紀末から16世紀初頭の土師器を伴う。また、この時期に属する大阪府枚方市楠葉野田西遺跡出土の擂鉢は、1494、1499年の年号が確認できる木簡と共に出土した。

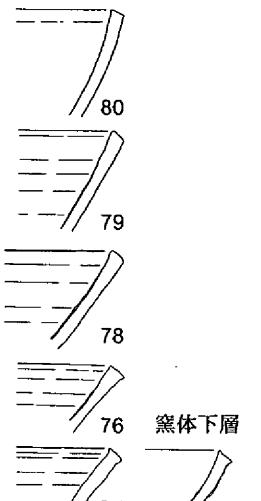
V期の擂鉢は内向き気味に口縁部が立ち上がり、その先端には段を持つ。これは、強いヨコナデによるものである。このため先端部は尖った印象となる。甕口縁部玉縁は、下半部を強くなることにより四線状の沈線が巡るようになる。壺口縁部玉縁は縮小し、さらに強いヨコナデで押しつぶされるため、断面形は三角形に近い形状となる。16世紀前半から中頃を下限とする愛媛県松山市湯築城出土資料、京都府京都市山科本願寺出土資料をここに含む。後者の方が新しい様相を有すると考える。

山崎古窯跡出土備前焼の時期について

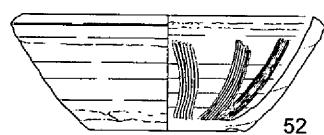
山崎古窯跡出土備前焼の擂鉢、壺、甕の形態種は第18図に示したとおりである。これは、先の分類を基に、形態の変遷を考慮に入れつつ、各層位ごとに並べたものである。次に、各層位ごとの出土状況を概観する。窯体内では、第3床面より出土した遺物は、第2層出土遺物より古い様相を持つものを含み、第2層のほうがより新しい様相を持つものが出土したことがわかる。また、溝内より出土した遺物に関しても、下層より上層の方が新しい様相を有することがわかる。これは、前項で行った型式分類の変遷の妥当性を間接的に保証するものであると考えるが、ただ同時に、異なる型式が同一層位において出土することを示し、分類した型式が同時に制作されていた可能性が高く、示した型式の前後関係が必ずしも成り立たない可能性を示すものとなる。この点をもって、前項の型式分類は製作時期を無視した無意味な細分との批判も可能である。また、窯体内第5層出土遺物の中で、壺が最も古い様相を有するにも関わらず、擂鉢に関しては、上層であるはずの第3床面出土遺物の中において比較的新しい様相を持つものと共通の特徴を持つことからも指摘できる。この問題点については、後の作業中において現状の認識を述べることとし、ここでは、下層のものより上層のものが新しい様相を持つ資料が出土する傾向にある事実を述べることにとどめておく。

これを先の分類に照らしあわせると、III B期からIV A-2期の後半には達しない段階に相当する。このことから、廃棄された最も古い年代が14世紀中頃から後半に含まれる資料群と型式的に類似したものを、山崎古窯跡は生産していたと想定することが可能である。よって、山崎古窯跡の操業時期は、

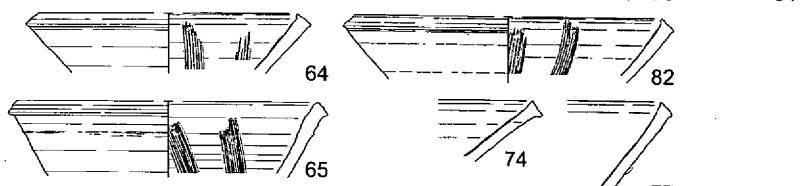
窯体第3床面



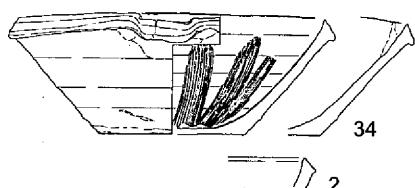
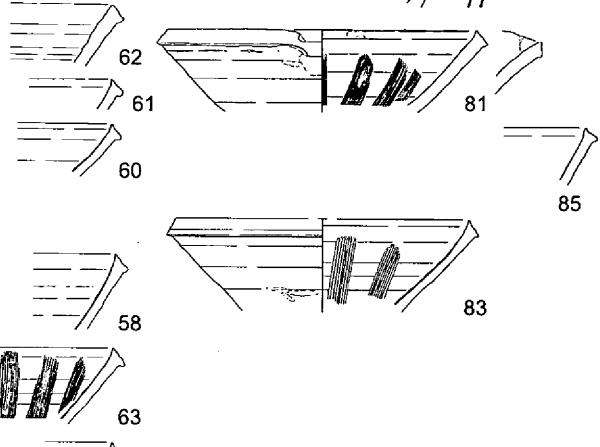
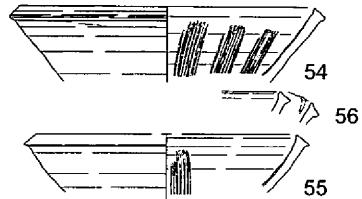
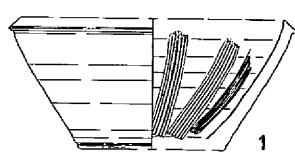
溝下層(第16、17層)



窯体第2層



溝上層(第1、13層)



2

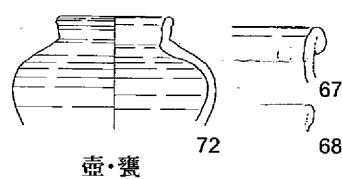
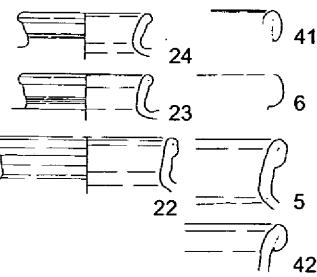
擂鉢

10cm



86

10cm



10cm

第18図 山崎古窯跡層位別出土遺物一覧 (1/8)



伊部南大窯東4号窯跡 1~4 合ヶ瀬南1号窯 26~28、34~38 山崎古窯跡 39~79
 合ヶ瀬南1号窯 5~8 伊部南大窯東5号 9~19 不老山西口1号窯跡 25 片口閉地窯新 94~119
 グイヒケ谷窯跡 20~24、29~33
 ※1、9~19、94~98は、石井2000aよりトレース。

第19図 窯跡出土備前焼型式分類試案（壺・甕1/25、その他1/10）

第1表 備前焼窯跡一覧（発掘調査されたものに限る）

窯名	全長	幅(m)	角度	出土遺物の時期	第19図遺物番号
1 片口団地窯古	不明	約1m	不明	I (未確認)	
2 伊部南大窯東4号窯跡	不明	不明	不明	I B	1~4
3 伊部南大窯東5号窯跡	11m以下	1.8m	26度	II A	9~19
4 合ヶ瀬北窯	10.1m	1.3~1.4m	22~25度	II A	5~8
5 合ヶ瀬南2号窯	8m以上	1.5~1.6m	17度	II A (未確認)	
6 不老山西口1号窯跡	推定9m	1.6~1.7m	30度	II B	25
7 グイビケ谷上窯跡	約12m	約1.4m	約30度	II B~III B	20~24、29~33
8 グイビケ谷下窯跡	約12m	約1.4m	約30度		
9 合ヶ瀬南1号窯	11.5m	1.3~1.6m	約31度	III A~III B	26~28、34~38
10 山崎古窯跡	推定20m	2.1~2.5m	20~35度	III B~IV A	39~79
11 不老山東口窯跡	推定40m	3.2~3.4m	15~20度	IV B	80~93
12 片口団地窯新	不明	不明	不明	V	94~119
13 伊部南大窯東3号窯跡	46m以上	3.4~4m	18度	V	
14 不老山西口2号窯跡	推定10m	2.7m	15度	VI	
15 伊部南大窯西2号窯跡	13.6m以上	1.3~1.5m	15度	VI	
16 伊部南大窯西1号窯跡	16.1m	3.7~4.5m	17度	天保11 (1840)~明治初年 (1868)	

14世紀中頃から後半、あるいはその前後のいずれかの時期となる。しかし、この年代は草戸千軒町遺跡の土師器編年に拠るところが大きく、自然科学的年代測定等を基に導き出した実年代と共に検証を加えたものではない。よって、この年代は未だ流動的なものであることは了承願いたい。

また、操業期間についてもここで言及すべき問題として取り扱うのが本来であると考えるが、その方法が現状では皆目検討がつかないのである。出土した備前焼の型式の中で、最も古い傾向を持つ資料と最も新しい傾向を持つ資料を抽出し、そこから継続期間を求めることが可能ではないかとも考えたが、異なる型式に属する資料が生産の場である窯体内同一層において多く出土するのは厳然たる事実である。そのことを念頭に置けば、そこから期間を導き出す方法がまったくもって無意味なことは明白である。これまでに示した型式分類は中世備前焼全体の形態変化を見据えた上での分類であり、また、そこから求めた先後関係である。そのため、ある年代一点を抽出するのであれば、ここで提示した型式が入り交じりながら制作されていたことが大いに考えられる。これを把握しようと試みるのであれば、まず今後の窯跡調査資料の増加を待ち、そこでの出土状況を把握し、それと共に、分類の妥当性、問題点を検証することが必要となる。このため、現状では、出土遺物の型式より窯跡操業期間まで言及することは不可能な作業であると言わざるを得ない。

窯体規模の変遷

ここでは備前焼窯跡の変遷を追うこととする。しかし、発掘調査を行った備前焼窯跡の数はごく少数であり、また、全容がわかる資料は皆無に等しい状況である。よって、ここではその構造の変遷まで述べることは不可能であるため、大まかに規模等の概略のみについて述べることとする。

概略を述べる前に、まず、窯跡から出土した資料を先ほど行った型式分類にあてはめ、それぞれの窯跡の時期を把握しておく。それを示したのは第19図であり、第1表である。これらを基に窯の規模を見ると、III B期までの窯は全長10m前後、幅1.5m前後であるが、III B~IV A期に推定全長20m、幅2.5mの山崎古窯跡が出現する。この時期に窯が大型化するのはこれまでの研究で言われてきたように、量産化と大きく関わるものと考える。IV B期になるとさらに窯の大型化は進み、不老山東口窯跡は推定全長40m、幅3.4mを測る。この時期より窯の傾斜角度は緩やかになる傾向にある。その後、V期でも後半段階にあたる伊部南大窯東3号窯跡は推定全長が46mを超え、幅も4mにも達する。

III B~IV A期の画期について

中世備前焼窯の変遷においてIII B~IV A期に大きな画期があり、これは量産化に伴うものであることは多くの研究者の認めるところである。それと時期を同じくして、備前焼の胎土は砂礫の目立つ荒

いものが増加する。そして、擂鉢の体部は直線的に開く傾向にあり、その端部内側をヨコナデにより上方へ突出させるようになる。これも量産化を目的としたことに起因する結果であろう。直線的に体部が開くのは、より多く重ねることを目的としたものであり、端部内側を上方に突出させるのは、重ねて焼く際に溶着する部分となるべく少なくすることを目的としたものであると私自身は考えている。

おわりに

本来ならば、窯跡出土資料を基に型式組列を組み立てた後に消費地の状況を把握すべき所であるが、現状では発掘調査を行った窯跡が少ないため、このような本末転倒となる方法を探ることとなった。今後増加するであろう資料を基に生産状況を把握し、その資料より型式組列を組み直すべきである。そうすることにより、時期比定を行う上で、備前焼の果たす役割がより重要なものになると考える。

分類を行うにあたり、製作技法について多く言及したが、私自身は陶芸に関して全くの素人である。そのため、実際の技術にそぐわない記述を行ってきたのではないかと、不安な点がいくつか思い当たる。実際制作に携わる方に御指摘、御教示いただきたい。

参考文献

- ・石井啓「伊部南大窯跡周辺窯跡群出土遺物について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 2000a
- ・石井啓「伊部南大窯跡周辺窯跡群」「確認調査現地説明会資料」 2000b
- ・石田寛監修『岡山県の地理』福武書店1978
- ・伊藤晃・上西節雄「備前」「日本陶磁全集』10 中央公論社 1977
- ・伊藤晃「備前焼」「えとのす」25 新日本教育図書 1984
- ・伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」「中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985
- ・伊藤晃「窯業」「岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- ・上西節雄「備前焼研究史」「陶説』569 日本陶磁協会 2000
- ・岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」「国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985
- ・岡山県企画部土地対策課「土地分類基本調査」和氣・播磨赤穂 1982
- ・岡山県教育委員会「岡山県歴史の道調査報告書」「山陽道」「岡山県歴史の道調査報告書』第一集1992
- ・岡山県史編纂委員会「岡山県史」第一巻自然風土 山陽新聞社 1983
- ・岡山県史編纂委員会「岡山県史」第三巻古代 II 山陽新聞社 1989
- ・岡山県史編纂委員会「岡山県史」第二巻古代 I 山陽新聞社 1991
- ・岡山理科大学「岡山学」研究会「備前焼を科学する～窯はなぜ移動したか～」 2000
- ・沖縄県教育委員会「首里城」「沖縄県文化財調査報告書」第132集
- ・長船町史編纂委員会「長船町史」通史編2001
- ・桂又三郎「新説備前焼入門」おかやま社 1952
- ・角川日本地名大辞典』編纂委員会「角川日本地名大辞典」33岡山県 角川書店1989
- ・鎌木義昌「グイビ谷窯跡群」「岡山県大百科事典』山陽新聞社 1980
- ・河本清・葛原克人「不老山古備前窯址」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」1972
- ・財団法人愛媛県埋蔵文化財センター「湯築城跡」第1分冊「埋蔵文化財発掘調査報告」第66集 1998
- ・堺市教育委員会「堺環濠都市遺跡（SKT112）発掘調査報告」「堺市文化財調査報告」第41集 1989
- ・下村筋子「楠葉野田西遺跡出土の備前焼擂鉢と共伴遺物」「第1回中近世備前焼研究会資料』 1999
- ・山陽新聞社「海底の古備前 水ノ子岩学術調査記録」1978
- ・山陽新聞社「やきものの備前」1990
- ・柴田圭子「伊予の備前焼（I）」「紀要愛媛』創刊号 2000
- ・田代健二「東備西播開発有料道路建設事業実施にともなう埋蔵文化財調査報告」「備前市教育委員会 1974
- ・田代健二「亀井戸麻寺確認調査報告」「備前市埋蔵文化財調査報告」2 備前市教育委員会1984
- ・田代健二「亀井戸遺跡発掘調査報告」「備前市埋蔵文化財調査報告」3 備前市教育委員会1986
- ・田代健二「備前市文化財調査年報」(1)「備前市埋蔵文化財調査報告」4 備前市教育委員会1988
- ・田代健二「船山遺跡発掘調査報告」「エヌ・ティー・エヌ東洋ペアリング運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会 1985
- ・田代健二「備前市内採集の遺物について」「古代吉備」第10集 1988
- ・谷口透夫・石田寛監修「岡山県風土記」胫文社 1996
- ・千葉豊「備前市新庄西畠田遺跡採集の繩文土器」「古代吉備」第9集 1987
- ・坪井聰子「中世備前焼の普及についての一考察」「島根県考古学会卒業論文発表資料』 2000
- ・時賀奈歩か「船山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」155 岡山県教育委員会 2001
- ・永田宗秀・近藤知子「山科本願寺1」「平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要」「京都市埋蔵文化財調査研究センター1999
- ・中野栄夫「備前国香登莊」「岡山県史研究』第5号 岡山県史編纂室 1983
- ・西川宏・間壁忠彦「コロタイプ図版解説 岡山県と氣部備前町が瀬黒址」「考古学研究』第14巻第3号 1967
- ・乗岡実「備前焼擂鉢の縦年について」「第3回中近世備前焼研究会資料』 2000
- ・乗岡実「中世の備前焼甕（壺）の縦年案・紀年銘資料にみる大甕（壺）の変遷」「第2回中近世備前焼研究会資料』 2000
- ・服部実喜「関東地方の紀年銘資料に伴う陶器」「貿易陶磁研究』No.6 1986
- ・備前焼紀年銘土型調査委員会・備前市教育委員会「備前焼紀年銘土型調査報告書」 1998
- ・平井泰男「中世の遺構・遺物について」「百間川原尾島遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」56 建設省河川工事事務所・岡山県教育委員会 1984
- ・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「草戸千軒町遺跡」「広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報」1975~1990 1977~1991
- ・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「草戸千軒町遺跡発掘調査報告」I ~ V 1993~1996
- ・間壁忠彦・間壁蘋子「備前焼研究ノート（I）～（4）」「倉敷考古学研究集報』1、2、5、18 1966、1966、1968、1984
- ・間壁忠彦「遺跡調査と備前焼」「陶説』333 日本陶磁協会 1980
- ・間壁忠彦「合が瀬窯跡群」「岡山県大百科事典』山陽新聞社 1980
- ・間壁忠彦「備前焼の縦年と分布」「島根県立博物館調査報告」第3冊 1982
- ・間壁忠彦「備前焼」「考古学ライブリー』60 ニューサイエンス社 1991
- ・間壁忠彦「備前焼の窯跡」「陶説』569 日本陶磁協会 2000
- ・間壁忠彦・西川宏「岡山県備前町合が瀬古窯群」「日本考古学協会年報」19 1971
- ・山口市教育委員会「大内館跡」「山口市埋蔵文化財調査報告書」第13集

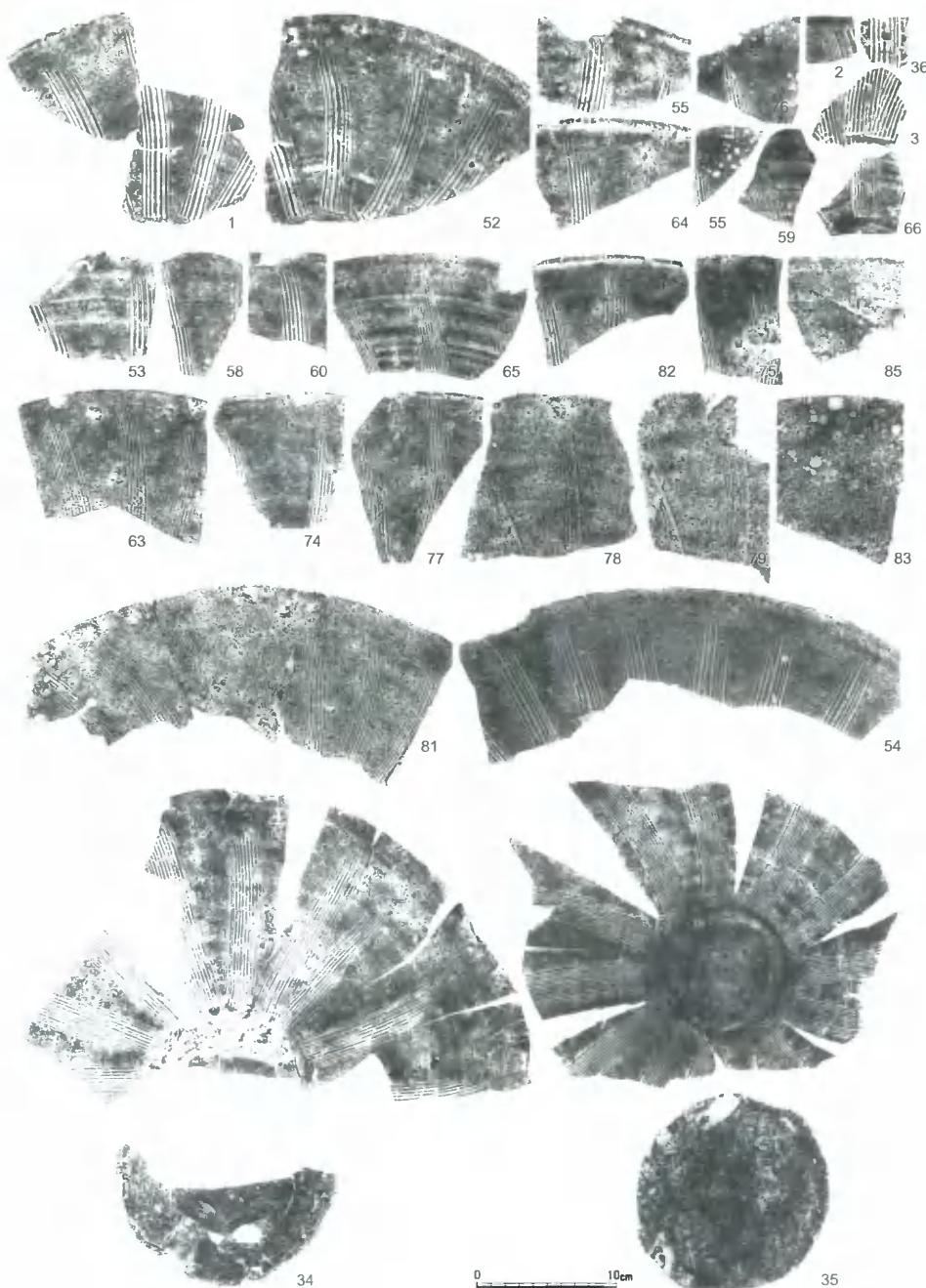
第2表 遺物観察表（擂鉢）

地質番号	実測番号	出土地点	土種	口径 (mm)	底面 (mm)	外面 (mm)	内面 (mm)	断面	胎土	備考		剖面・断面形状 (cm)	剖面凹凸部幅 (cm)	剖面凹凸部深 (cm)	
1	B16	H	13	274	150	148	2,5Y5/1 (赤灰)	10YR4/1 (赤灰)	10YR4/1 (赤灰)	1mm以下白色細粒 多	1/8		20	6	0.5~1.5
2	C21	H	1	-	-	-	10YR5/2 (赤灰)	10YR5/2 (赤灰)	10YR5/2 (赤灰)	5mm弱 細粒 少	口絶部小片	22	8	0.6~2	2
3	B39	H	1	-	-	-	10YR5/4 (赤灰) 10YR5/2 (赤灰)	10YR6/4 (赤灰) 10YR5/2 (赤灰)	10YR6/4 (赤灰) 10YR5/2 (赤灰)	1.5mm以下白色細粒 中 2mm以下白色細粒 中 2mm以下白色細粒 値	成形状質	24	9	0.5~1.8	1.2~1.9
4	C 5	H	1	-	-	-	N5/0 (赤) 10YR6/1 (褐灰)	5YR7/1 (赤灰)	10YR6/1 (赤灰)	1mm以下白色細粒 少	底部小片	-	-	-	-
34	I	F, H	13	317	150	127	7,5YR4/1 (赤灰)	7,5YR4/1 (赤灰)	7,5YR4/1 (赤灰)	6~7mm弱 少 3mm以下白色細粒 多	竹籠で持ち上げて痕跡あり	24.5	12	0.6	2
35	3	G, H	13	-	136	-	2,5YR5/3 (赤灰) N7/ (赤灰)	2,5YR5/2 (赤灰)	2,5YR5/3 (赤灰)	1mm以下白色細粒 多 1mm以下白色細粒 多	底部下端印痕あり	21	10	0.5~0.7	1.5
36	C31	H	13	-	-	-	10YR4/1 (赤灰)	10YR3/1 (赤灰)	10YR3/1 (赤灰)	5mm弱 細粒 低	底部のみ	22	7	0.5~1.0	2.2~2.8
52	B 1	H	16	303	163	123	7,5YR5/2 (赤灰)	10YR5/2 (赤灰)	7,5YR5/2 (赤灰)	6~7mm弱 多 3mm以下白色細粒 多	底部小片	20	6	0.8~1.0	3.1
53	B35	H	16	-	-	-	2,5Y5/1 (赤灰)	5Y5/1 (赤灰)	5Y5/1 (赤灰)	1mm以下白色細粒 中 1mm以下黑色細粒 蛋	口絶部1/10	-	-	0.8~1.9	2.1~4.0
54	2	H	17	309	-	-	2,5YR5/3 (にぶい赤灰)	2,5YR5/3 (にぶい赤灰)	2,5YR5/3 (にぶい赤灰)	3~7mm弱 低	口絶部外面自然釉付盤	23	7	1.5~2.2	2.1
55	B43	H	17	273	-	-	10YR4/3 (赤灰)	N4/0 (赤)	2,5YR5/4 (赤灰)	1mm以下白色細粒 少 1mm以下白色細粒 低	口絶部1/2 注口付近	20	6	0.3~1.2	2.5~3.0
56	C27	H	17	-	-	-	10YR5/3 (にぶい赤灰)	N4/0 (赤)	2,5YR5/4 (赤灰)	1mm以下白色細粒 中 1mm以下黑色細粒 値	口絶部小片 注口付近	-	-	-	あり
58	B17	A	2	-	-	-	17,5YR4/2 (赤灰)	7,5YR4/2 (赤灰)	7,5YR4/2 (赤灰)	3mm弱 1mm以下白色細粒 多 1mm以下白色細粒 低	口絶部1/10	-	-	0.5~1.0	1.8~2.5
59	B25	B	2	-	-	-	10YR4/3 (赤灰)	10YR5/1 (赤灰)	2,5YR4/1 (赤灰)	5~6mm弱 少 1mm以下白色細粒 白 0.5mm以下白色細粒 低	口絶部小片	12以上	5以上	1.2	1.5
60	B20	E	2	-	-	-	7,5YR4/3 (にぶい赤灰)	10YR4/3 (赤灰)	10YR4/3 (赤灰)	1.5mm以下白色細粒 中	口絶部1/10	22.5	8	0.5~1.2	2.5
61	B22	E	2	-	-	-	5YR4/2 (赤灰)	5YR4/2 (赤灰)	5YR4/2 (赤灰)	1mm以下白色細粒 少	口絶部小片 注口付近の小片	-	-	-	-
62	B21	E	2	-	-	-	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	1.5mm以下白色細粒 低 1.5mm以下黑色細粒 値	口絶部小片	20	10	0.5~1.0	1.1
63	B15	B	2	280	-	-	5YR5/1 (赤灰)	5YR5/1 (赤灰)	5YR5/1 (赤灰)	1mm以下白色細粒 低 1mm以下黑色細粒 低	口絶部1/8 外面部自然釉付盤、置き台に使用	24	11	0.5~1.2	1.2
64	B16	E	2	271	-	-	10YR4/1 (赤灰)	7,5YR5/1 (赤灰)	7,5YR5/1 (赤灰)	2mm以下白色細粒 少	口絶部1/8 外面部自然釉付盤、置き台に使用	18	7	0.5~0.8	1.5~2.2
65	B 3	C	2	315	-	-	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	3mm弱 中 1.5mm以下白色細粒 少	口絶部1/8	21	10	0.5~1.0	1.5
66	B31	C	2	-	-	-	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	2,5Y5/1 (赤灰)	2.5mm以下白色細粒 少 2.5mm以下黑色細粒 少	底部小片	20	10	0.9	1.5
71	B 4	B	第3床面	-	-	-	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	N5/0 (赤)	1.5mm以下白色細粒 多 1.5mm以下黑色細粒 低	口絶部1/10 底部強み質しい	20	7以上	0.5	1.5~2.0
75	B14	D	第3床面	-	-	-	N5/0 (赤)	2,5Y5/1 (赤灰)	2,5Y5/2 (赤灰)	1mm以下白色細粒 低	口絶部1/10 底部質	22	10	0.3~1.0	1.8
76	B18	D	第3床面	-	-	-	2,5Y5/2 (赤灰)	2,5Y5/2 (赤灰)	2,5Y5/2 (赤灰)	2mm以下白色細粒 少 1.5mm以下白色細粒 低	口絶部1/10 底部質	20	9	0.5~0.8	1.5~1.8
77	B 7	C	第3床面	-	-	-	N5/0 (赤)	5YR4/2 (赤灰)	5YR4/2 (赤灰)	1.5mm以下白色細粒 低 1.5mm以下黑色細粒 低	口絶部1/10 底部質	22	10	0.5~1.0	1.5
78	B 8	C	第3床面	-	-	-	N5/0 (赤)	5YR3/1 (赤灰)	5YR3/1 (赤灰)	2.5mm以下白色細粒 多 2.5mm以下黑色細粒 多	口絶部1/10 底部質	25	11	0.5	0.5~1.2
79	B 13	D	第3床面	-	-	-	10YR4/1 (赤灰)	10YR7/2 (にぶい赤灰)	10YR4/1 (赤灰)	1.5mm以下白色細粒 少 1.5mm以下白色細粒 低	口絶部1/10 底部質	-	-	-	-
80	d	E	第3床面	-	-	-	-	7,5YR4/2 (赤灰)	7,5YR4/2 (赤灰)	2mm以下白色細粒 中 2mm以下黑色細粒 低	口絶部1/10 底部質	-	-	-	-
81	B30	B, D	第3床面	327	-	-	N5/0 (赤)	10YR1/ (赤灰)	10YR1/ (赤灰)	3~5mm弱 少	外面部自然釉付盤、置き台に使用	24	11	1	1.5
82	B12	D	第3床面	325	-	-	7,5YR4/2 (赤灰)	5YR4/1 (赤灰)	5YR4/1 (赤灰)	2mm以下白色細粒 少 1mm以下白色細粒 低	口絶部1/4 底部質	25	11	0.3~1.2	1.8
83	B 6	E	第3床面	310	-	-	7,5YR4/1 (赤灰)	5YR4/1 (赤灰)	5YR4/1 (赤灰)	1mm以下白色細粒 少	外面部自然釉付盤、多量の黒色付着、底面強み質	20	9	0.3~0.5	1.8
84	B24	D	第3床面	5	-	-	5YR4/1 (赤灰)	N4/0 (赤)	N4/0 (赤)	1mm以下白色細粒 多 1mm以下黑色細粒 低	外面部自然釉付盤、底面強み質	-	-	-	-
85	B33	D	第3床面	-	-	-	5YR4/1 (赤灰)	5YR3/1 (赤灰)	5YR3/1 (赤灰)	1mm以下白色細粒 低	外面部自然釉付盤、底面強み質	22	9	-	-

第3表 遺物観察表（壺、甕ほか）

遺物番号	実物番号	出土地點	土層	器種	口径 (mm)	底径 (mm)	外面	内面	断面	胎土	状態	備考
5	B38	H	1	甕	-	-	5Y6/1 (灰)	2.5Y5/1 (黄灰)	N4/0 (灰)	3~7mm壁 多 2mm以下白色細粒 多 2mm以下褐色細粒 併	口縫部小片	外面自然釉付着
6	C23	H	1	甕	-	-	5YR5/2 (灰褐色)	-	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	1.5mm以下白色細粒 少 1mm以下褐色細粒 少	口縫部小片	外面自然釉付着
7	C22	H	1	甕	-	-	10YR6/2 (灰黃褐色) 10YR6/3 (淡黃褐色)	10YR6/2 (灰黃褐色) 10YR6/3 (淡黃褐色)	10YR6/2 (灰黃褐色) 10YR6/3 (淡黃褐色)	2.5mm以下白色細粒 中 2.5mm以下褐色細粒 併	口縫部小片	焼成軟質
8	C6	H	1	甕	-	-	2.5YR4/3 (にぶい赤褐色)	2.5YR4/3 (にぶい赤褐色)	7.5YR5/1 (灰)	3~7mm壁 中 1mm以下白色細粒 少 1mm以下褐色細粒 併	頸部小片	
9	B45	H	1	甕	-	-	2.5YR4/3 (にぶい赤褐色) 7.5YR5/3 (にぶい赤褐色)	2.5YR4/2 (灰)	5YR5/1 (灰) N3/0 (灰)	2.5mm以下白色細粒 中 1mm以下褐色細粒 併	肩部1/8	外面自然釉付着
10	C16	H	1	甕	-	-	5YR6/1 (灰)	N6/0 (灰) 2.5Y5/1 (黄)	N6/0 (灰)	3mm壁 少 1.5mm以下白色細粒 少 2mm以下褐色細粒 中	頸部片	外面自然釉付着
11	C15	H	1	甕	-	-	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	2.5YR4/2 (灰)	5YR4/1 (灰)	2mm以下白色細粒 中 2mm以下褐色細粒 中	肩部片	外面ハケ目
12	C24	H	1	甕	-	-	N7/0 (灰白)	10R4/4 (赤褐色) 7.5YR4/2 (灰)	N7/0 (灰白) N4/0 (灰)	3mm壁 中 1mm以下白色細粒 中 1mm以下褐色細粒 併	肩部片	外面自然釉付着、風化が著しい
13	C39	H	1	甕	-	-	2.5YR3/3 (暗赤褐色)	2.5YR4/3 (にぶい赤褐色)	5YR4/1 (褐色) 7.5YR6/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 中 1.5mm以下黑色細粒 少	底部片	底部の下に残っていた土浴着 内面自然釉多量付着 焼き歪みが著しい
14	B2	H	1	甕	-	304	10R3/2 (暗赤褐色)	10R4/3 (赤褐色)	2.5YR4/2 (灰褐色) 2.5YR4/1 (赤褐色)	3~7mm壁 中 2mm以下白色細粒 多 3mm以下黑色細粒 併 2mm以下褐色細粒 中	底部片	底部の下に残していた土浴着 焼き歪みが著しい
15	C1	H	1	甕	-	-	2.5YR3/3 (暗赤褐色) 7.5YR5/3 (にぶい赤褐色)	7.5YR6/1 (褐色)	7.5YR6/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 少 1.5mm以下褐色細粒 併	底部小片	内面自然釉付着
16	C7	H	1	小甕	-	-	7.5YR4/1 (褐色)	N4/0 (灰)	7.5YR4/2 (灰褐色)	1mm以下白色細粒 少	肩部小片	
17	C3	H	1	甕	-	-	N5/0 (灰) N4/0 (灰)	N4/0 (灰) N5/0 (灰)	N4/0 (灰) N5/0 (灰)	1mm以下白色細粒 少 1mm以下黑色細粒 併	頸部小片	外面平行タキ痕、内面円形(?) あり
18	C2	H	1	甕	-	-	N7/0 (灰白) N6/0 (灰)	N6/0 (灰)	N4/0 (灰)	3mm壁 少 1mm以下白色細粒 多 1mm以下褐色細粒 併	肩部小片	3条/10mm幅描き直線文
19	C4	H	1	甕	-	-	10YR4/1 (褐色)	2.5Y3/1 (黒褐色)	5YR4/1 (褐色)	0.5mm以下白色細粒 中 0.5mm以下褐色細粒 併	肩部小片	9条/15mm幅描き直線文
20	C17	H	1	甕	-	-	5YR5/3 (にぶい赤褐色) 5YR4/2 (赤褐色)	10YR5/2 (灰褐色)	10YR5/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 多	肩部片	外面玉だれの痕跡あり 内面金色に光る
21	C26	J	12	花瓶	-	-	2.5YR4/3 (にぶい赤褐色)	2.5YR4/2 (灰)	N5/0 (灰)	3~7mm壁 中 2mm以下白色細粒 中 1mm以下黑色細粒 併 1mm以下褐色細粒 併	小片	器種、額書き検査
22	B41	H	13	甕	175	-	2.5YR5/2 (灰褐色)	2.5YR5/2 (灰褐色)	5YR5/1 (褐色)	2mm以下白色細粒 中	口縫部1/6	外面自然釉付着
23	B37	H	13	甕	131	-	5YR7/1 (灰白)	5Y6/1 (灰) 5Y6/1 (褐色)	5Y6/1 (灰) N5/0 (灰)	2mm以下白色細粒 少 1mm以下黑色細粒 併 1mm以下褐色細粒 併	口縫部1/6	B40と同一個体の可能性あり
24	B40	H	13	甕	130	-	5Y7/1 (灰白)	5Y7/1 (灰白)	5Y6/1 (灰) N5/0 (灰)	3~5mm壁 少 1.5mm以下白色細粒 中 1.5mm以下黑色細粒 併	口縫部1/6	B37と同一個体の可能性あり
25	C11	H	13	甕	-	-	5YR5/1 (褐色)	10YR4/1 (褐色)	10YR4/1 (褐色)	1mm以下白色細粒 中	肩部小片	擦書き直線文2箇所残存
26	C32	H	13	甕	-	-	N7/0 (灰白)	10YR6/1 (褐色)	10YR6/1 (褐色)	2mm以下白色細粒 中	肩部小片	擦書き直線文C28と同一個体の可能性あり
27	C33	H	13	甕	-	-	5YR3/3 (暗赤褐色)	5YR4/2 (赤褐色)	5YR4/2 (赤褐色) 10R4/3 (赤褐色)	1.5mm以下白色細粒 少 1mm以下白色細粒 併	肩部小片	外面自然釉付着、擦書きあり 擦書き直線文
28	C19	H	13	甕	-	-	7.5R3/2 (赤褐色)	10R4/2 (赤褐色)	N5/0 (灰) 10YR5/2 (灰褐色)	1.5mm以下白色細粒 多 1.5mm以下褐色細粒 少	肩部小片	3条/9.5mm幅描き直線文、波状文
29	C13	H	13	甕	-	-	2.5Y7/2 (灰褐色) 2.5Y8/4 (淡褐色)	10YR6/1 (褐色)	10YR6/1 (褐色)	1mm以下白色細粒 少 1mm以下黑色細粒 中	肩部小片	5条/17mm幅描き波状文、波状文3箇所
30	C12	H	13	甕	-	-	5YR4/2 (灰褐色)	7.5YR5/2 (灰褐色)	7.5YR4/1 (褐色)	10mm程壁 少 1mm以下白色細粒 中	肩部小片	4条/10mm幅描き波状文、直線文
31	C37	H	13	甕	-	-	N6/0 (灰) 10YR8/4 (淡黃褐色)	N6/0 (灰) 10YR8/4 (淡黃褐色)	N6/0 (灰) 10YR8/4 (淡黃褐色)	3mm壁 少 2.5mm以下白色細粒 中	底部片	焼き歪みが著しい
32	C35	H	13	小甕	-	-	SYR5/4 (にぶい赤褐色)	10YR6/3 (にぶい黄褐色)	10YR7/1 (灰白)	1mm以下白色細粒 併 1mm以下黑色細粒 併	口縫部小片	外面指で押された痕跡があり、並みがある、注口付近か
33	C18	H	13	甕	-	-	10YR6/4 (にぶい黄褐色)	10YR6/4 (にぶい黄褐色)	10YR6/4 (にぶい黄褐色)	1mm以下白色細粒 少 1mm以下褐色細粒 中	口縫部小片	焼成軟質
37	5	F	13	小甕	-	-	7.5YR6/3 (にぶい褐色)	2.5YR6/4 (にぶい褐色)	N5/0 (灰)	0.5mm以下白色細粒 併	測部1/4	胎土精緻
38	C34	H	13	小甕	106	-	7.5YR5/2 (灰褐色)	7.5YR5/2 (灰褐色)	5YR6/6 (灰)	0.5mm以下白色細粒 併	口縫部小片	重ね焼きの痕跡あり
39	C9	H	13	小甕	-	49	N6/0 (灰)	N6/0 (灰)	10YR6/1 (褐色)	1mm以下白色細粒 少	底部1/4	底部系切り
40	C14	H	13	甕	-	-	10YR5/2 (灰褐色)	5YR5/2 (灰褐色) N4/0 (灰)	2.5Y5/1 (褐色)	3mm壁 少 2mm以下白色細粒 中 1mm以下褐色細粒 併	肩部片	外面自然釉付着、ヘラ記号(?)あり
41	C36	F	13	甕	-	-	N6/0 (灰)	-	N6/0 (灰)	3~7mm壁 中 2mm以下白色細粒 多 1mm以下褐色細粒 併	口縫部小片	
42	B36	F	13	甕	-	-	2.5YR3/3 (暗褐色)	2.5YR3/3 (暗褐色)	5YR5/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 多 1.5mm以下褐色細粒 少	口縫部1/10	B23と同一個体の可能性あり
43	C29	H	13	甕	-	-	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	10R4/3 (赤褐色)	2.5YR5/1 (赤褐色)	3~7mm壁 中 2mm以下白色細粒 多 1mm以下褐色細粒 併	肩部片	外面自然釉付着 ヘラ記号?
44	C20	H	13	甕	-	-	2.5Y4/1 (黄褐色)	7.5YR5/2 (灰褐色)	5YR5/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 多	肩部片	外面玉だれの痕跡あり
45	C8	H	13	甕	-	-	N4/0 (灰)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色) N4/0 (灰)	2mm以下白色細粒 少 2mm以下褐色細粒 併	肩部小片	外側ハケ目-10条/12mm-出位 内面ナデの工具あたり底が残る
46	C25	H	13	甕	-	-	N4/0 (灰)	N4/0 (灰)	N4/0 (灰)	3mm壁 少 1mm以下白色細粒 中 1mm以下褐色細粒 併	肩部小片	外面ハケ目
47	C38	H	13	甕	-	-	10R4/2 (灰赤)	5YR4/2 (灰褐色)	5YR5/1 (褐色)	5mm壁 少 1.5mm以下白色細粒 中 1.5mm以下褐色細粒 中	肩部片	
48	B44	H	13	甕	-	280	10R4/4 (赤褐色)	5YR4/2 (灰褐色)	2.5YR5/1 (赤褐色) 10R5/2 (灰褐色)	3~7mm壁 多 2mm以下白色細粒 多 1mm以下褐色細粒 併	底部片1/6	内面タキ後ナデ、自然釉付着
49	C10	H	13	甕	-	-	10YR6/4 (にぶい黄褐色)	10YR6/4 (にぶい黄褐色)	10YR7/4 (にぶい黄褐色)	1mm以下白色細粒 多 1mm以下褐色細粒 併	底部片1/4	底面模様痕跡が残る
50	C30	H	13	甕	-	-	2.5YR3/3 (暗赤褐色)	5YR4/3 (にぶい赤褐色)	5YR5/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 少 1.5mm以下褐色細粒 併	底部片1/4	底面自然釉多量付着 焼き歪みが著しい
51	B47	H	13	甕	-	-	420	5YR4/2 (灰褐色) 2.5Y4/1 (黄褐色)	5Y4/1 (灰) 10YR6/1 (褐色)	1.5mm以下白色細粒 多 1.5mm以下褐色細粒 併	底部片1/10	底面自然釉付着
57	C28	H	17	甕	-	-	5Y6/1 (灰)	2.5Y6/1 (褐色)	2.5Y6/1 (褐色)	2mm以下白色細粒 中 1mm以下黑色細粒 併 1mm以下褐色細粒 併	肩部小片	擦書き直線文2箇所残存 C32と同一個体の可能性あり
67	B23	D	2	甕	-	-	2.5YR3/3 (暗褐色)	2.5YR3/3 (暗褐色)	5YR5/1 (褐色)	3~5mm壁 中 1.5mm以下白色細粒 少 1.5mm以下褐色細粒 併	口縫部小片	B36と同一個体の可能性あり
68	B29	D	2	甕	-	-	2.5Y5/1 (黄)	10YR5/2 (灰褐色)	-	1mm以下白色細粒 少 1mm以下褐色細粒 併	口縫部小片	
69	B28	D	2	こね鉢	-	-	7.5YR4/1 (灰褐色)	7.5YR4/1 (灰褐色)	7.5YR4/1 (灰褐色)	1mm以下白色細粒 併	口縫部1/10	外側ハケ目-10条/12mm-出位 内面砂付着
70	B30	D	2	こね鉢	-	-	2.5YR5/3 (にぶい赤褐色)	10R4/3 (赤褐色)	5YR4/2 (灰褐色) 2.5YR5/4 (にぶい赤褐色)	1mm以下白色細粒 少	底部片	外側ハケ目
71	B26	D	2	甕	-	-	7.5YR3/3 (にぶい赤褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色) 2.5YR4/1 (灰褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色) 2.5YR4/1 (灰褐色)	5~6mm壁 少 1mm以下白色細粒 多 1mm以下褐色細粒 併 1mm以下褐色細粒 併	肩部小片	擦書きにより文様を施した後、上下を板状工具によるヨコナデで仕上げて揃えている。
72	B16	B	2	甕	114	-	5YR4/3 (にぶい黄褐色)	10YR6/3 (にぶい黄褐色) 10YR5/2 (灰褐色)	7.5YR4/1 (灰褐色) 2.5Y6/1 (灰褐色)	1.5mm以下白色細粒 多 1.5mm以下褐色細粒 少 1mm以下褐色細粒 併	口縫部から肩部1/3	内面金色に光る
73	B32	C	2	甕	-	184	N6/0 (灰)	N6/0 (灰)	N6/0 (灰)	3~6mm壁 中 2mm以下白色細粒 少 2mm以下黑色細粒 少	肩部自然釉付着	底面模様痕跡が多く残る、灘底痕跡か
86	B27	A	6	甕	129	-	5YR4/1 (灰褐色)	5YR4/1 (灰褐色)	5YR4/1 (灰褐色)	1mm以下白色細粒 少 1mm以下褐色細粒 併	口縫部1/8	
87	B11	D	6	甕	-	-	5YR4/2 (灰褐色)	5YR4/2 (灰褐色)	N6/0 (灰)	3mm壁 少 1.5mm以下白色細粒 多 1.5mm以下褐色細粒 少	口縫部1/8	焼き歪み
88	B19	C	6	甕	-	-	7.5YR3/2 (黒褐色)	2.5YR5/6 (明赤褐色)	2.5YR5/6 (明赤褐色)	2mm以下白色細粒 少 2mm以下褐色細粒 併	肩部小片	外面自然釉付着
89	B10	D	6	甕	-	-	5YR4/2 (灰褐色)	2.5Y5/4/1 (灰褐色) 2.5Y5/4/1 (赤褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)	2mm以下白色細粒 少 2mm以下褐色細粒 併	肩部1/8	外面自然釉付着
90	B9	D	第3 床面	甕	-	-	10YR6/2 (灰褐色)	7.5YR5/2 (灰褐色) 10R5/6 (赤)	10R5/6 (赤)	3~5mm壁 中 2mm以下白色細粒 少 1mm以下褐色細粒 併	肩部1/8	

図版 1



擂鉢拓本 (1/4)

図版 2



壺、甕、その他拓本 (14)



1 調査区全景（北東より）



2 窯跡から片上湾を望む（西より）

図版 4



1 窯体第3床面検出（南東より）



2 窯体埋土（南東より）



3 窯体埋土（南より）



4 窯体第3床面下（東より）



5 窯体縦断面（南より）

図版 5



1 調査風景（南東より）



2 溝埋土（南東より）



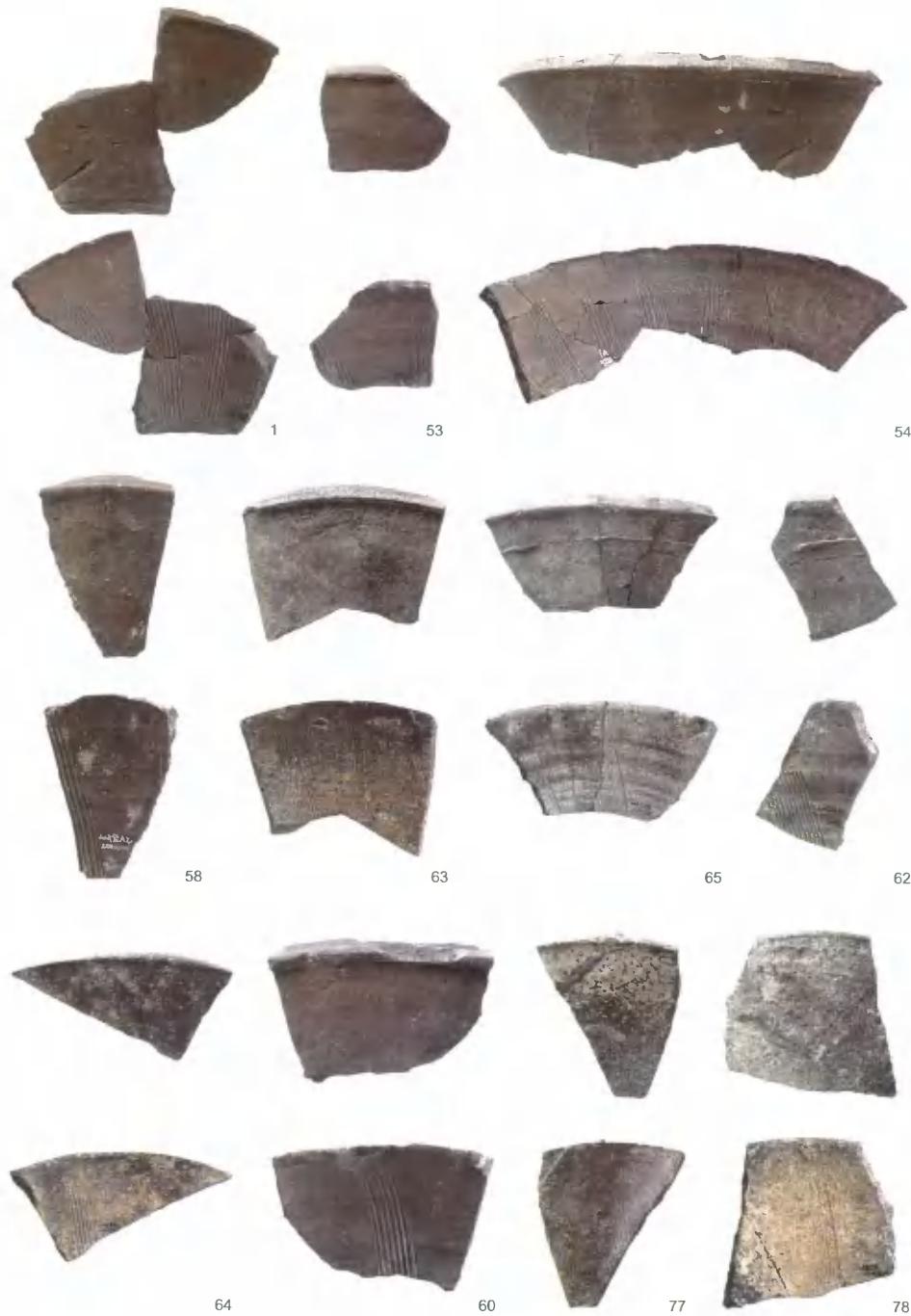
3 窯体第2床面下溝（南東より）

4 窯体完掘（南東より）



5 調査終了（南より）

図版 6



出土遺物



出土遺物

図版 8



14



72



52



34
出土遺物



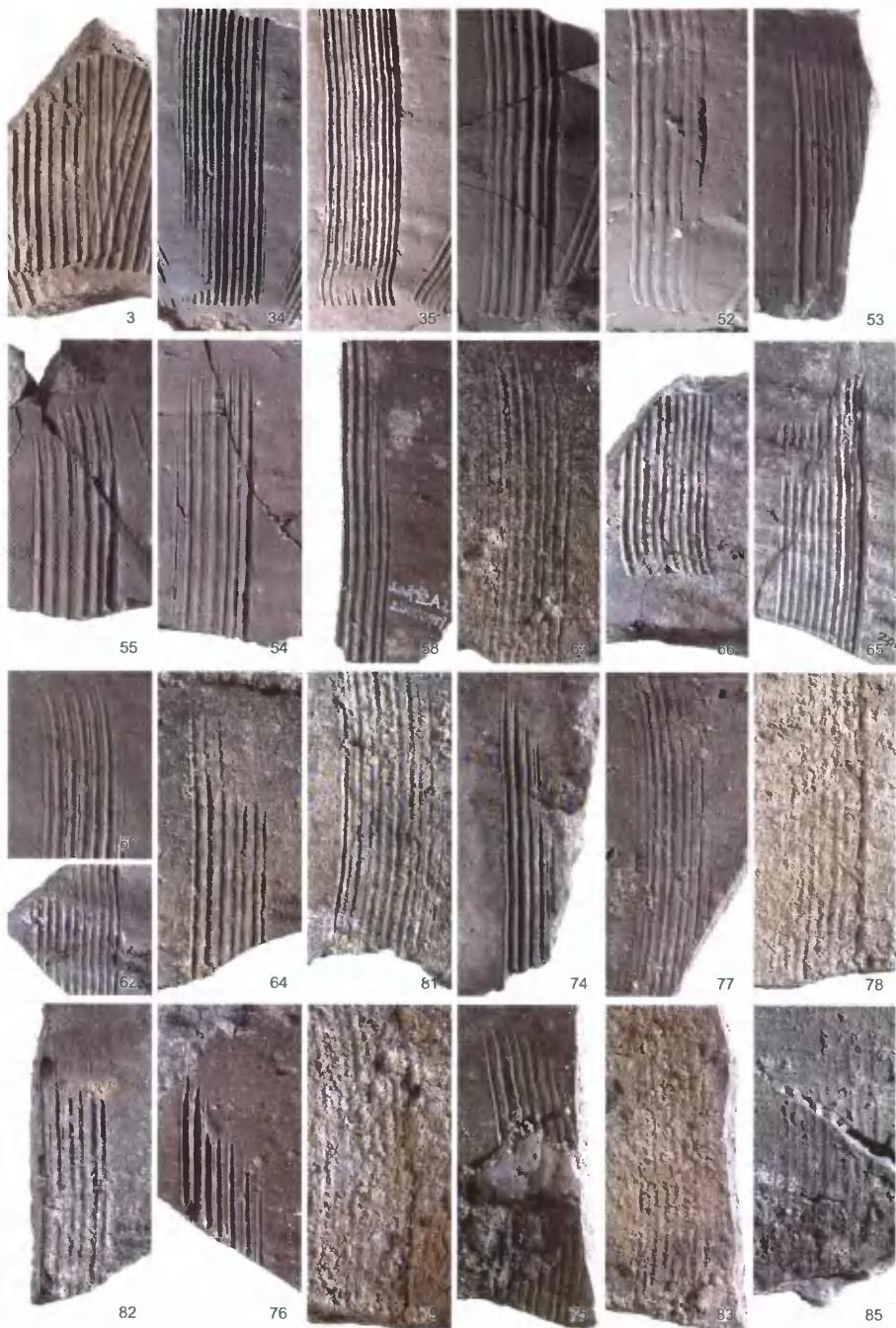
35

図版 9



出土遺物断面

図版 10



擂鉢卸し目



窯壁 (1/2)



第5層



第5層



第7層

床面断面 (1/2)

報告書抄録

ふりがな	やまさきこようせき							
書名	山崎古窯跡							
副書名	一般県道磯上備前線道路改築に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	167							
編著者名	重根弘和・高畠知功							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
編集機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	°	'	°	'			
山崎古窯跡	岡山県 備前市 伊部	211	—	34° 43' 44"	134° 10' 8"	2000.9.4～ 2000.10.12	330	一般県道磯上備前 線道路改築に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山崎古窯跡	窯跡	中世	窯跡・溝		備前焼・窯壁		中世備前焼窯跡	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 167

山崎古窯跡

一般県道磯上備前線道路改築に伴う発掘調査

平成14年3月22日 印刷

平成14年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印 刷 ワシュウ印刷株式会社
岡山県岡山市当新田381-3